

石見銀山遺跡調査ノート 6

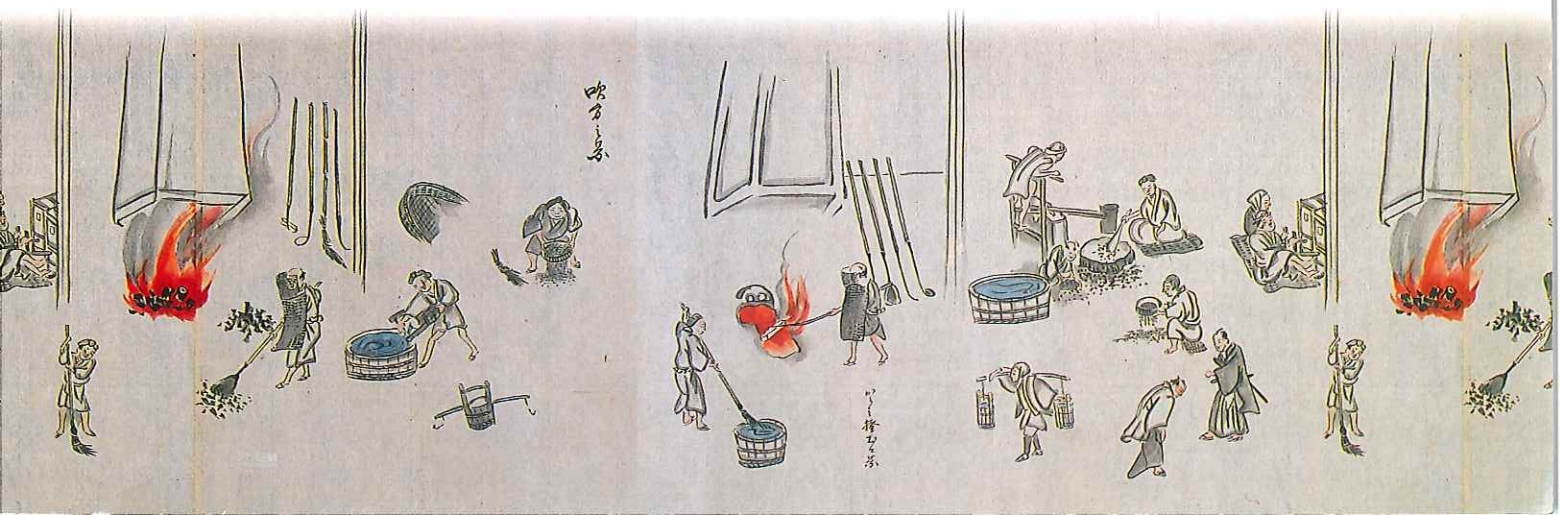
Iwami-Ginzan Silver Mine Site Research Note Mar. 2007 No.6

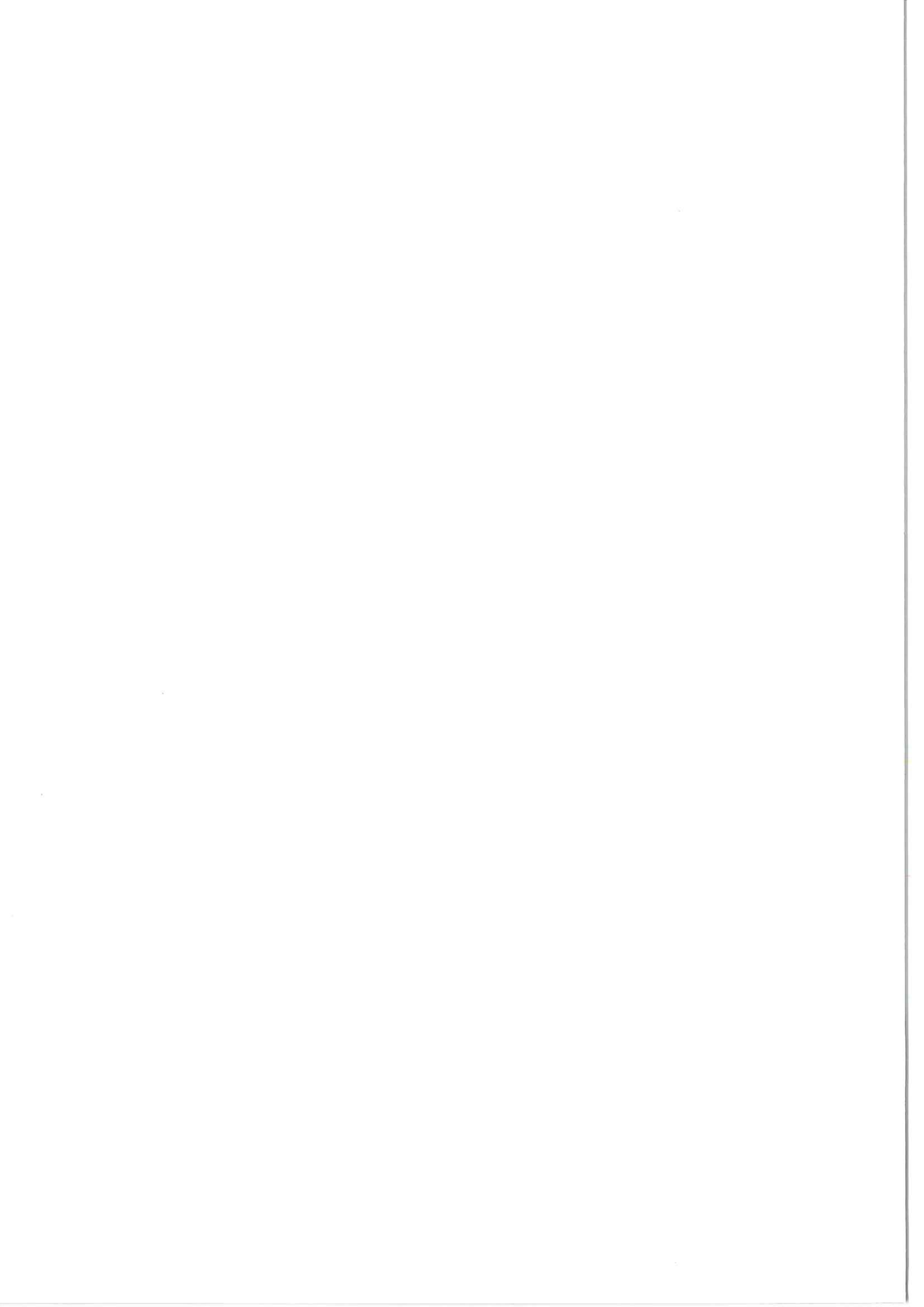


平成18年度版

2007. 3

島根県教育委員会
大田市教育委員会





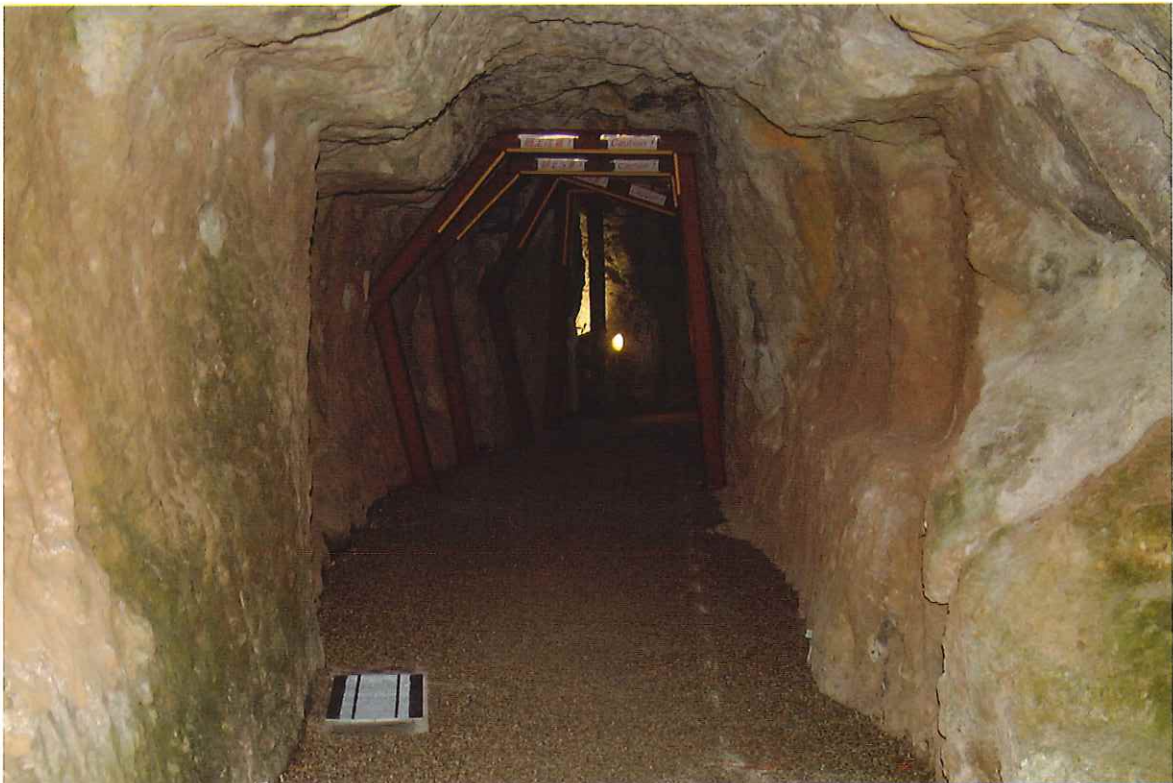
石見銀山遺跡調査ノート 6

Iwami-Ginzan Silver Mine Site Research Note Mar. 2007 No.6

表紙デザインは「御取納丁銀」（島根県）と「石見銀山絵巻」（中村俊郎氏）を図案化したものです。



口絵1 温泉津沖上空からみた石見銀山と温泉津



口絵2 整備後の龍源寺間歩（旧坑道）



口絵 3 本谷地区釜屋間歩地点Ⅰ区の岩盤加工遺構（検出状況）



口絵 4 本谷地区釜屋間歩地点Ⅱ区調査区全景

■凡例

1. 本書は鳥根県及び大田市両教育委員会が実施する石見銀山遺跡に関わる調査及び関連事業の概要を中心にまとめたものである。
2. 内容は平成18年度（2006）に行った調査事業の概要を記した年次報告編と、調査に携わった関係者の研究レポート・資料紹介からなる調査ノート編の2部構成からなり、併せて関連する出版物や関係先などの諸情報を加えた。
3. 詳しくは、調査ごとに刊行する報告書等を参考にしていきたい。
4. 本書の編集は、鳥根県教育庁文化財課世界遺産登録推進室が行った。本書を今後の石見銀山の調査研究や整備活用のための基礎的な情報として活用していただければ幸いである。

■目次

年次報告編

I 石見銀山遺跡総合調査の概要	
1. 発掘調査の概要	1
2. 石見銀山歴史文献調査団の調査概要	5
3. 石造物調査の概要	7
4. 科学調査の概要	8
5. 生物調査の概要	8
6. 間歩調査の概要	8
II 石見銀山遺跡関連事業の概要	
1. 重要伝統的建造物群保存地区保存整備事業	
(1) 大森銀山地区	11
(2) 温泉津地区	11
2. 整備活用・情報発信事業	
(1) サイン整備事業	13
(2) 遺跡整備事業	13
(3) 石見銀山協働会議	14
(4) 国際シンポジウム	15

調査ノート編

I 資料紹介	17
1. 石見銀山領における郷宿と下宿	中木紗友美 17
2. 石見銀山遺跡昆布山谷地区の出土銭貨について	目次 謙一 22
3. 矢筈城跡表採資料について	田原 淳史 29
II 報告書・出版物情報（2006.4～2007.3）及び補遺	31
III 平成18年度石見銀山遺跡調査等関係者	38
IV 平成18年度石見銀山遺跡事業実施箇所位置	42

■解説

口絵1 温泉津沖上空からみた石見銀山と温泉津

左奥の山が仙ノ山、左手前が沖泊。そして中央やや左に見える町が温泉津。石見銀山で産出された銀は沖泊から海路、博多そしてアジア諸国へと運ばれていった。沖泊が銀の積み出し港としての機能を失って以降も、温泉津は石見銀山への物資の搬入や年貢米の積み出し港として栄えた。

口絵2 整備後の龍源寺間歩（旧坑道）

現在唯一公開されている間歩。江戸時代中期に代官所直営の間歩として操業されたもので、平成元年度に見学が出来るように整備された。今年度、さらに安全・安心に見学できるように再整備した。

口絵3 本谷地区釜屋間歩地点Ⅰ区の岩盤加工遺構（検出状況）

釜屋間歩の北西で検出した遺構。岩盤を削りぬいて平坦面を造り出しており、現状でも3段の平坦面が確認できる。上から2段目の発掘調査を行い、建物跡、水溜などを検出している。水溜は6基検出しているが、内部にユリカスが堆積しており、ほとんどが選鉱用の水溜と考えられる。選鉱用の水溜が集中し、他に製錬関連の遺構が確認できないことから、2段目の調査部分については選鉱施設の可能性が高い。

口絵4 本谷地区釜屋間歩地点Ⅱ区調査区全景

左下には精錬の炉跡、右下には選鉱用石組みの水溜、中央上部には礎石建物が検出され、この場所で銀生産の一連の作業が行われていたことが確認できる。右下の調査区拡張部分では、道路遺構と側溝も検出された。

年次報告編

I 石見銀山遺跡総合調査の概要

1. 発掘調査の概要

(1) 内容及び実施期間

大森地区の調査	平成18年5月～平成18年6月
本谷地区の調査	平成18年7月～平成19年3月
報告書の作成	

(2) 大森地区の調査

大森地区では駒の足地区と蔵泉寺口地区で調査を行った。

駒の足地区は、銀山地役人であった宗岡家の庭と考えられる場所で3面の遺構面を確認した。

上面は出土遺物などから18世紀頃と考えられ、道に近い側では建物跡の基礎と思われる石列と土間面を検出した。宗岡家の母屋に近い側では底面と側面を石で囲った石組み遺構を検出した。漆喰状の粘土で目張りされていることから池もしくは水溜めと推定され、庭の一部を構成するものと考えられた。現存の建物が、これらの遺構と同時期のものであれば、建物は寛政の大火（1800年）以前の建築と考えられる。

下層では、整地土やズリ・カラミ層の堆積を除き、表土から約2m下がったところで石列や杭などの遺構、陶磁器、下駄などの遺物を検出した。出土した陶磁器は、中国から輸入された磁器や初期の唐津などが中心であり、これら下層遺構は16世紀末～17世紀初頭の銀山最盛期のものと確認された。

蔵泉寺口地区では家屋の改修に伴う試掘調査を行なった。この建物は明治期に建てられたと考えられており、以前の改修時に床下から江戸期まで遡る石組みの溝が見つかった。

調査によって、本来あった溝を埋めて溝の方向を変えていることが確認され、建物を建てる時に流路を付け替えたと推定された。これらの遺構は出土遺物から19世紀頃のものと考えられた。

(3) 本谷地区の調査

本谷地区の調査は今年で4年目である。

岩盤加工遺構の2段目の調査では、調査区を広げたところ、選鉱用の水溜と建物跡のみが確認され、この2段目は選鉱施設であることが確定的になった。

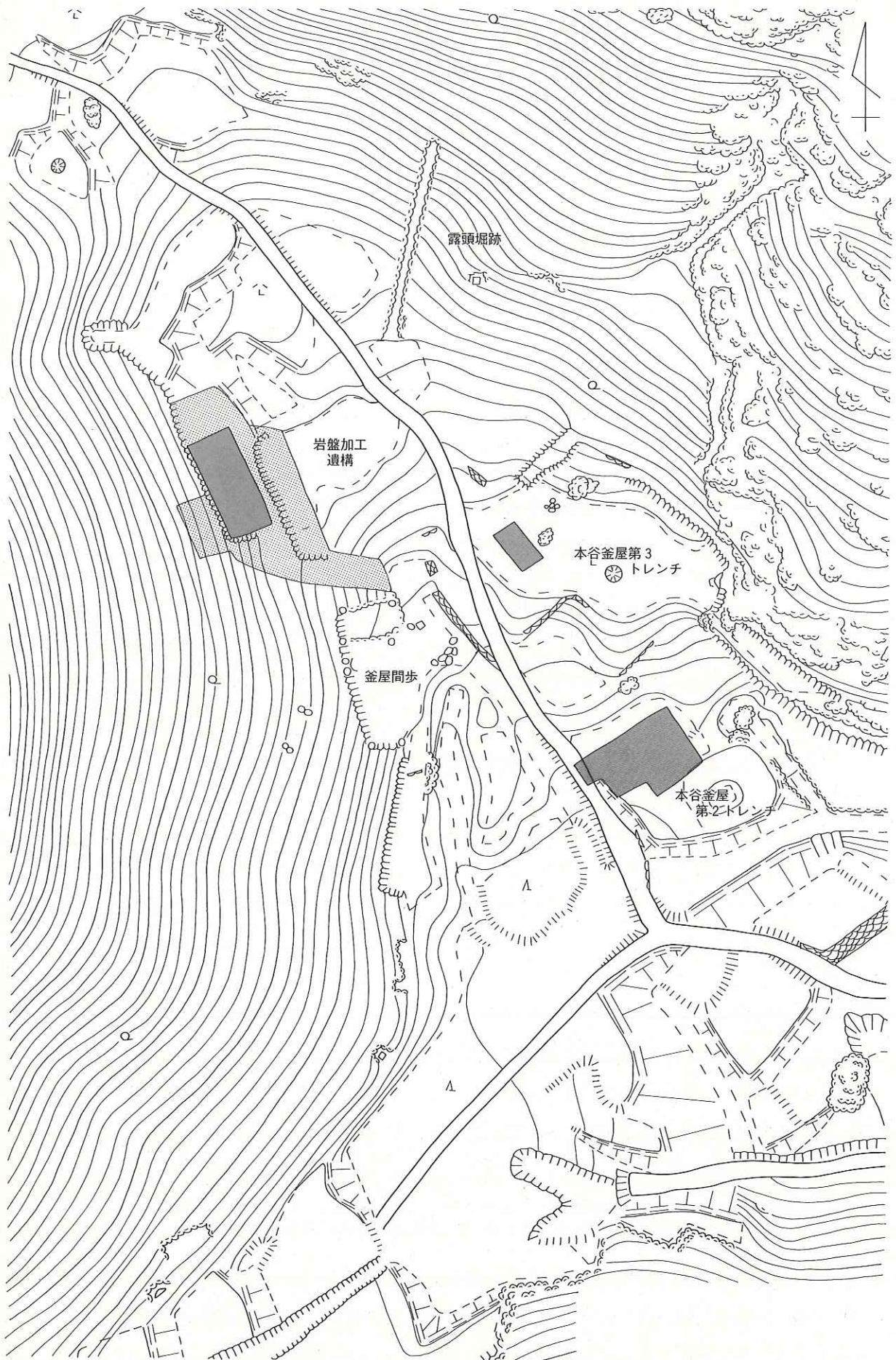
また、釜屋間歩前の第2トレンチでも、調査区を広げて調査を行い、礎石建物を検出した。

ここでは選鉱のための水溜め遺構や、製錬を行っていた炉跡なども見つかり、採掘から精錬までの一連の作業をこの谷内で行っていた様態が明らかとなりつつある。

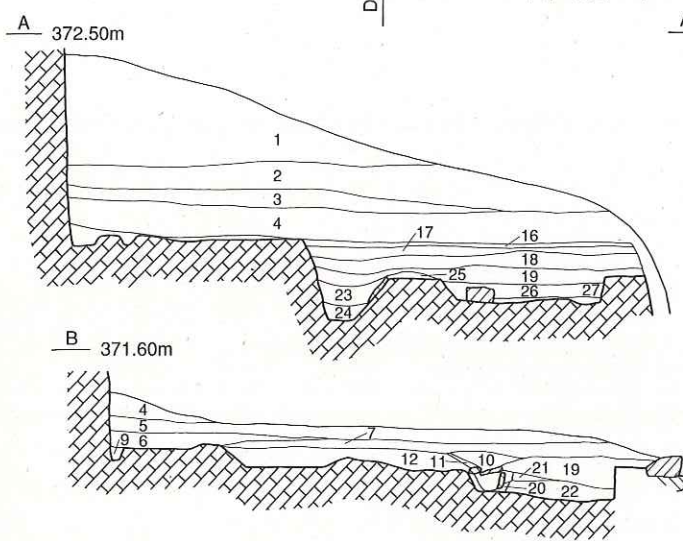
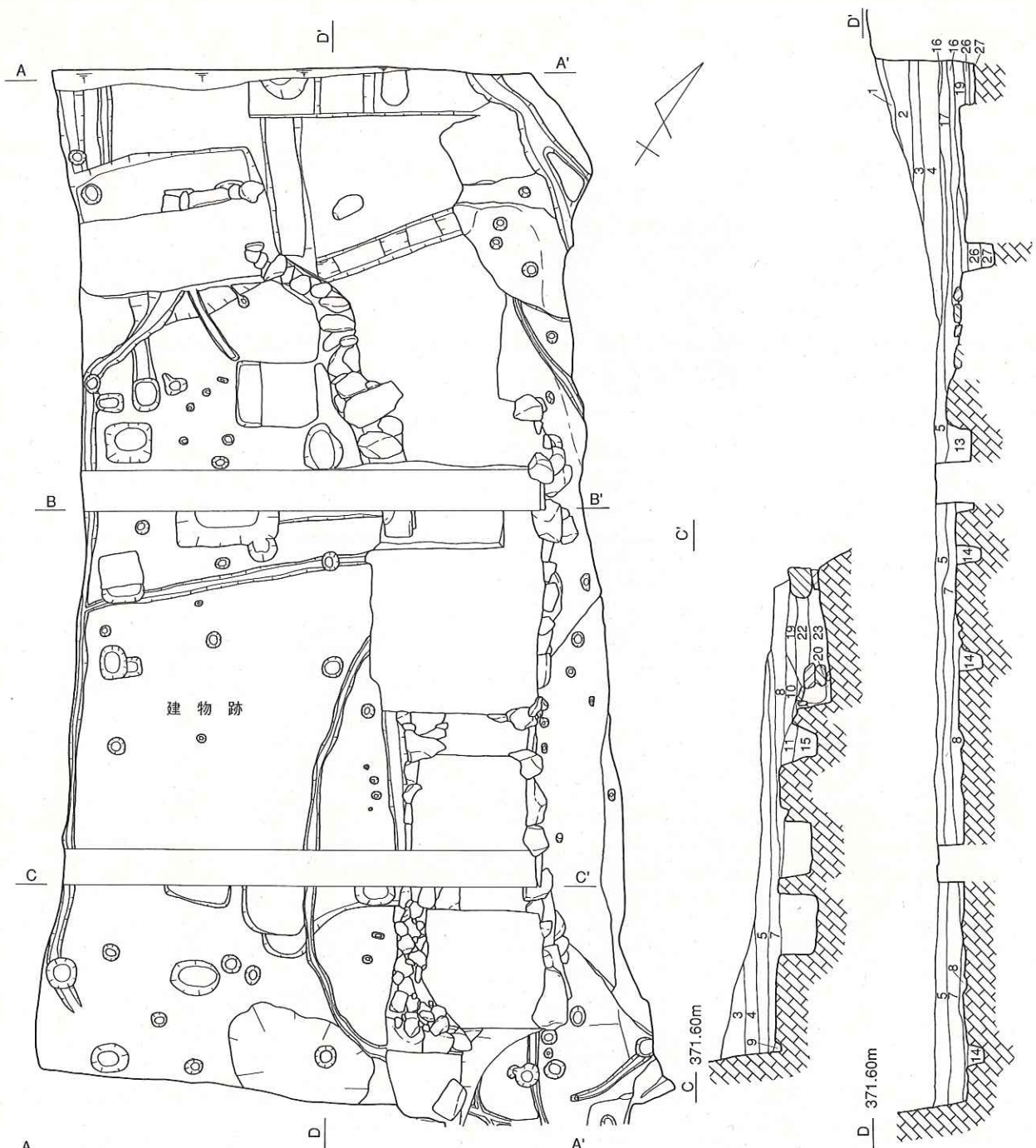
さらに調査区西側では谷の中央を通る道路遺構と側溝も確認され、本谷の構造解明が進んだ。

この他、岩盤加工遺構の対面に位置する岩盤の表土を除いたところ、岩盤を削って階段状にした通路や、岩盤加工遺構と同様に岩盤を垂直に削り落としている痕跡が見つかった。

今回、本谷で調査した遺構はいずれも江戸時代初期を中心とした時期で、ほぼ同時代に銀生産の

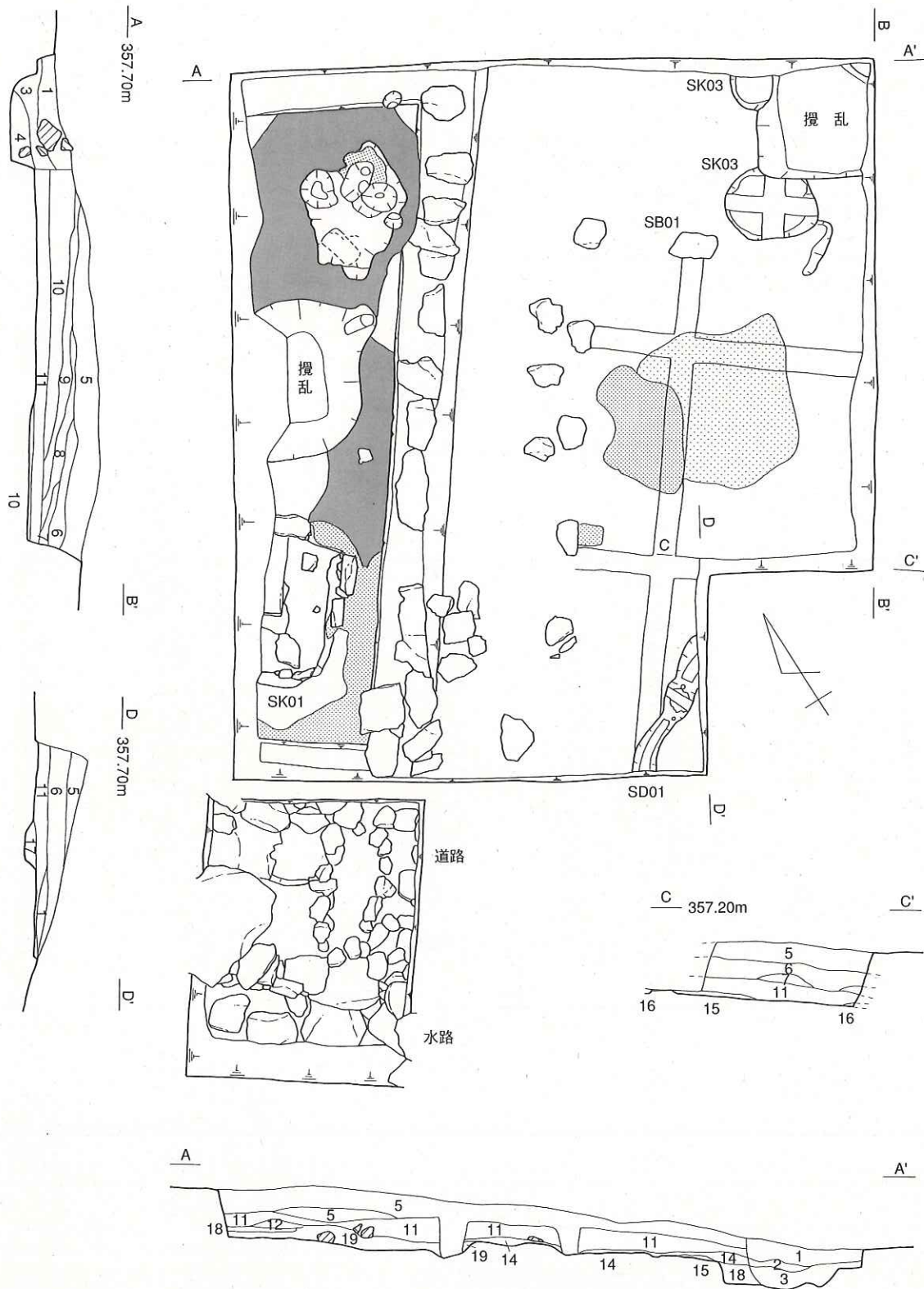


第1図 本谷地区トレンチ位置図 (S=1/500) ※一部改変



- | | |
|--------------------------|-----------------------|
| 1. 黒灰色砂質土
(小礫・カラミを含む) | 15. 黄褐色砂質土 |
| 2. 黄褐色土
(礫・ズリを含む) | 16. 明灰色粘質土 |
| 3. 淡黄褐色土
(小礫・ズリを含む) | 17. 灰褐色土 |
| 4. 黒灰色砂質土
(礫・ズリを含む) | 18. 灰黄色粘質土 |
| 5. 濃灰色粘質土 | 19. 明灰黒色土
(ズリを含む) |
| 6. 淡灰黄色粘質土 | 20. 濃灰色粘質土
(小礫を含む) |
| 7. 淡黄灰色土 | 21. 淡灰色粘質土
(小礫を含む) |
| 8. 淡灰色粘質土 | 22. 明黄色砂質土 |
| 9. 茶褐色粘質土 | 23. 黄灰色粘質土 |
| 10. 黄灰色粘質土 | 24. 濃灰色砂質土
(ズリを含む) |
| 11. 黒褐色粘質土
(ユリカスを含む) | 25. 黒色砂質土
(マンガン分) |
| 12. 明黄色粘質土 | 26. 淡黄色粘質土 |
| 13. 暗黄褐色土 | 27. 濃灰色砂質土
(小礫を含む) |
| 14. 黄褐色土 | |

第2図 岩盤加工遺構 第2段 平面図・断面図 (S=1/60) ※一部改変



- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| 1. 黒茶褐色土 | 11. 黄灰色土 (やや砂質。5cm程度の礫を含む) |
| 2. 茶褐色土 | 12. 黄褐色土 (やや砂質) |
| 3. 暗黄褐色土 (やや砂質) | 13. 暗黄褐色土 |
| 4. 黄灰色土 (やや砂質) | 14. 濃橙黄色土 |
| 5. 黒褐色土 (小礫を含む) | 15. 濃橙黄色粘質土 |
| 6. 灰褐色土 (やや砂質) | 16. 濃黄色粘質土 |
| 7. 灰黄褐色土 (黄褐色粘質土をブロック状に含む) | 17. 黄灰色土 (やや砂質。溝埋土) |
| 8. 暗灰褐色土 (やや砂質) | 18. 淡灰褐色土 (土坑埋土) |
| 9. 灰黄色土 | 19. 茶褐色土 |
| 10. 暗灰褐色土 (小礫を多く含む) | |

第3図 本谷釜屋 第二トレンチ 平面図 (S=1/40)

操業が行われていたことも判明し、この辺り一帯が当時大規模に開発されていた状況が伺えた。

史料に見える山師安原伝兵衛は、このあたりで大いに稼業し、千人以上を召し抱えていたといわれる。銀山最盛期の山師がどのように銀生産を行っていたのか。今回の調査で、そのことを窺い知る貴重な資料が豊富に残ることが確認された。発掘調査によって銀山最盛期における山の姿の一部が現れてきたともいえる。

2. 石見銀山歴史文献調査団の調査概要

(1) 内容及び実施状況

古文書調査

研究会の開催

データベースの入力・整備

調査報告書の作成

詳細は下記のとおり



文書の整理

(2) 熊谷家文書調査

調査日：2006年8月7日～10日

2007年3月26日・27日

場所：大田市立中央図書館

調査者：小林准士、中木紗友美、藤原雄高

(以下8月のみ) 伊田昌文、給下裕一、
福永圭祐、足立元、河瀬優紀、土井良子、
西綾子、八幡一寛、山内正明

8月には史料単位10の未整理分について、目録カードの作成を行った。史料単位10の箱には、訴状、願書など、石見銀山領の村々から代官所に差し出された一紙ものの文書があり、同領における紛争や支配の状況などが分かる史料を確認できた。

3月には、史料単位1～9の未整理分を整理し収納した。



写真の撮影

(3) 旧順勝寺文書調査

調査日：2006年8月23日

場所：大田市久手町森下家

調査者：小林准士、仲野義文、目次謙一、藤原雄高、
西村崇司

調査内容：本山（本願寺）から順勝寺に宛てた書状や過去帳を閲覧し撮影した。特に過去帳からは17世紀の銀山居住者の名前が分かり、今後分析することにより貴重な史料となるはずである。



旧順勝寺過去帳

(4) 佐渡史料調査

調査日：2006年9月12～14日

場所：佐渡市（大安寺、佐渡市教育委員会、佐渡市立中央図書館など）

調査者：田中圭一、小林准士、藤原雄高

大安寺等の過去帳を閲覧し、石見銀山から佐渡金銀山に移り開発に関係した人々の足跡を調査した。断片的にはあるが、いくつかの事例を確認したのと、佐渡金銀山に関する基礎的文献を収集した。



大久保石見守長安尊像

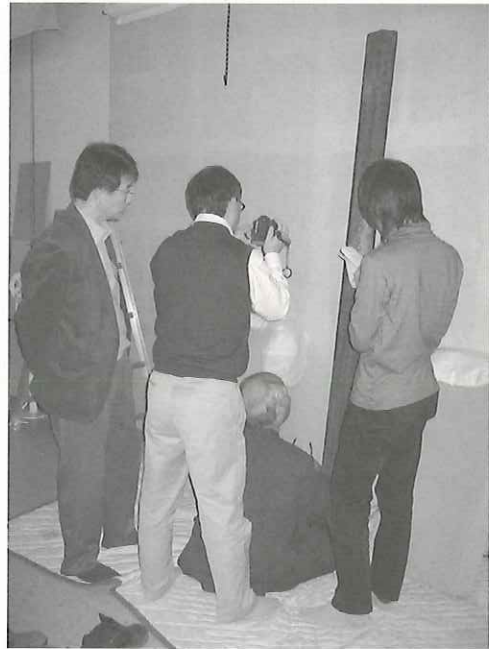
(5) 吉備津神社御釜殿棟札調査

調査日：2006年12月16日

調査場所：岡山県立博物館

調査者：田中圭一、仲野義文、原田洋一郎、目次謙一、藤原雄高

慶長17（1612）年、安原田兵衛とその一族の寄進によって吉備津神社御釜殿が再建されたことを示すこの棟札は、これまでにもしばしば紹介されてきたが、この度の調査では赤外線照射によって、これまで判読が困難であった文字をいくつか判読することができた。さらに、棟札の背面にも文字が記されていたことが新たにわかった。判読できる部分をみる限りでは、背面にも表面と同文が記されていたようである。



棟札の調査風景

(6) 研究会の開催

実施日：2006年12月17日

実施場所：島根県立男女共同参画センター「あすてらす」

参加者：調査団メンバーを中心とした調査関係者

《研究報告》

中木紗友美 「石見銀山御料の郷宿と宿」

仲野義文 「石見銀山周辺地域の産業～江の川流域のたたら製鉄と水運」

小林准士 「大森町の町役人と文書管理システム」

(7) データベース「石見銀山歴史資料検索システム」

国内及び海外関係史料分のデータベースの入力を行った。

(8) 調査報告書の作成

棟札・文献史料・石造物金石文等より安原備中関連史料を集成し、『石見銀山歴史文献調査報告書～Ⅲ 安原備中関連史料集～』として刊行した。次の史料から成る。

清水寺棟札

岡山県下の史料（吉備津神社棟札等） 『石州銀山紀聞』 清水寺関連史料

石造物金石文（早島町の安原備中顕彰碑等）

安原家文書 野沢家文書 阿部家文書 住友家史料

3. 石造物調査の概要

(1) 内容及び実施状況

内 容 温泉津地区石造物分布調査及び西念寺悉皆的調査の実施
安原備中関連石造物調査の実施
平成18年度調査報告書の作成

実施状況

- 5月15日 石造物調査検討会の開催（宮本・長嶺・中田・新川・尾村・松尾・田原）
- 6月14～ 温泉津地区石造物分布調査の実施
16日 （宮本・中田・新川・尾村・松尾・田原）
- 8月21日 石造物調査部会の開催（田中・池上・宮本・長嶺・中田・今田・新川・尾村・松尾・湯川・足立・鳥谷・田原）
- 10月31～ 西念寺の悉皆的調査及び調査報告書の作成についての検討（田中・池上・宮本・
11月1日 中田・新川・尾村・松尾・湯川・田原）
- 3月26・27日 安原備中関連石造物調査の実施

(2) 概要

①調査部会

8月21日に大田市温泉津町の温泉津コミュニティーセンターで開催した。部会では、昨年度までの調査内容の確認と、今年度の調査内容についての検討がされた。その結果、18年度も引き続き温泉津地区の石造物調査を実施し、対象場所を比較的古手の石造物が確認できる西念寺とすることを確認した。また、併せて銀山柵内の安原備中関連の石造物についても、今年度よりその実態を明らかにしていくことも確認した。

②分布調査

温泉津地区における石造物の分布状況については一部が明らかにされていたが、具体的な情報が得られていなかったため、それを明らかにする目的で6月14日から16日までの3日間にわたって実

施した。今年度は温泉街の寺院及びその周辺の丘陵上を対象とし、調査の結果約30箇所で見守り等石造物の存在する場所を確認した。

③ 悉皆的調査

調査対象とした西念寺は沖泊に向かう街道沿いに境内を構える寺院である。多くの石造物が存在する墓地は西念寺本堂に隣接するものや街道を挟んで存在するもののほかいくつかあるが、そのうち今年度は街道を挟んだところに造られている墓地を対象とした。この墓地は街道から約2mほど上がったところに造られたもので、斜面に掘り込まれた石窟も伴っている。石造物は墓石が中心で、組合宝篋印塔や一石五輪塔、無縫塔などを確認した。石窟内に納められていた組合宝篋印塔は相輪や笠のみのものも多く、またすべての部材が確認できるものについてもその組合せの確実なものはない。

なお、西念寺の悉皆的調査については来年度も継続して実施する予定である。

4. 科学調査の概要

(1) 内容及び実施状況

内 容 科学調査報告書の刊行

実施状況

7月27日 第1回科学調査部会開催(村上・高田・横山・長嶺・中田・広江・澤田・柴崎・足立・田原)

12月5日 第2回科学調査部会開催(村上・鳥越・横山・長嶺・中田・澤田・柴崎・足立・田原)

5. 生物調査の実施

(1) 内容及び実施状況

石見銀山遺跡は、「石見銀山遺跡とその文化的景観」という名称で世界遺産に推薦されているように、かつての鉱山経営の痕跡が自然景観と一体となって残っている点が高く評価されている。

しかし、島根県内における広域的な生物調査は、たとえば1978(昭和53)年度に当時環境庁の委託事業として島根県が実施した特定植物群落調査やその10年後に行われた追加調査がある程度で、当遺跡及びその周辺の自然について、これを対象とした具体的な調査研究は実施されてこなかった。

石見銀山遺跡の世界遺産登録が間近に迫ってきた昨今、世界遺産の登録審査では、推薦資産内の自然環境についてその保護対策ができていのかどうか厳しく問われるようになってきており、石見銀山遺跡のように文化的景観を全面的に打ち出した資産では、その傾向はより一層厳密になってきている。

将来的に当遺跡周辺の森林の管理計画にも反映できるような植生調査を含めた、生物調査を実施

し、この地域周辺の自然環境を早急に把握する必要性が生じている。

よって、今年度に急遽、将来の保護対策への基礎資料とするため、当遺跡の自然環境、特に、植生を中心とした生物環境について以下の調査を行うことにした。

- 1) 調査対象地域 石見銀山遺跡銀山柵内
- 2) 調査内容 石見銀山遺跡柵内の自然環境のうち、生物環境を広域的に把握・提示できる資料として、相観植生図を作成する。その方法として、既存の空中写真などを用いて、地区内に成立する植生の分布図を作成する。植生の区分は、空中写真から判読可能な相観レベルとする（竹林、植林などの種類区分）。なお、主要箇所では適宜現地調査を行うことにより、空中写真のデータを確認あるいは補正して、より正確な植生図を作成する。
- 3) 実施方法 財団法人三瓶フィールドミュージアム財団に委託して実施。

6. 間歩調査の概要

石見銀山遺跡においては、平成9年度から13年度にかけての学術調査により、583箇所の間歩と51箇所の露頭掘の存在が確認されていたが、その後の状況は把握できていなかった。

また、平成17年8月に同和鉱業(株)から鉱業権の譲渡を受けたことにより、現在、県は鉱業権者として間歩及び露頭掘（以下「間歩等」という。）の安全管理義務を負う立場にある。

このような事情から、間歩等の現在の状況を把握するとともに、必要な箇所に立入禁止杭の設置等の安全対策を行うため、間歩等の現況調査を実施した。

調査は、昨年4月から約3ヶ月にわたり、同和工営(株)に委託して行われた。主な調査項目は以下のとおりである。

- ① 所在地（世界測地系によるXY座標値、標高値）
- ② 規模（間歩については入口の大きさ、形状）
- ③ 間歩等及び周囲の状況
- ④ 坑道等の方角

このうち、③について程度別に分類したのが表1及び2である。間歩入口については、埋没が徐々に進行している傾向が見られた（表1）。また、露頭掘については、前回から大きな変化はなかったが（表2）、露頭掘周囲の風化が進んでいる箇所がいくつか見られた。

一方、安全対策としては、260箇所の間歩に立入禁止杭を設置するとともに、特に必要と判断した3箇所で危険防止柵を設置した。

なお、大田市では、遺跡を適切に保存管理していくとともに、世界遺産登録により見込まれる来訪者の急増に対応するため、大久保間歩の一般公開に向けた整備をはじめとする史跡整備事業に今年度から着手したところであるが、今回の調査結果は、この整備内容を検討する際の基礎データとしても活用された。

(表1) 間歩入口の状況

程度	前回	今回	増減
完全に残存	217	212	△5
半分程度埋没	206	201	△5
殆ど埋没	141	130	△11
完全に埋没	19	40	+21
合計	583	583	0

(表2) 露頭掘の状況

程度	今回
完全に残存	15
半分程度崩壊	34
殆ど崩壊	2
完全に崩壊	0
合計	51

※ 内訳は、前回
調査時と同じ。



立入禁止杭及び危険防止柵の設置状況



露頭掘

II 石見銀山遺跡関連事業の概要

1. 重要伝統的建造物群保存地区保存整備事業

(1) 大森銀山地区

今年度、地区内では4軒の修理、1件の修景を実施した。主な事業は下記のとおりである。

①高場家主屋 昭和区 (SyW2) 木造二階建棧瓦葺

昭和区にある町家。二階は大壁に袖壁を持つ重厚な造りで、正面に向かって左手に座敷を設け、右手は部屋を設けず小屋裏とし、一階仏間の天井を高く取っている。これが二階の外観を特徴づけている。

修理では大屋根と下屋の屋根葺替、出入口の柱間装置の復原、妻壁の補修などを行った。

②ワイルズ家主屋 羅漢町 (RaS5) 土蔵造二階建棧瓦葺

羅漢町にある町家。かつて地役人松浦氏の居宅があった所と伝わっている。幕末～明治初期建築の土蔵を中心とし、周囲に下屋を掛け渡して居室が設けられていた。空き家となって久しかったが、その間に雨漏りを原因とする構造材の腐朽が進行していた。

修理では下屋の半解体修理と土蔵外壁の補修を行った。

③八島家土蔵 新町 (SiE4) 土蔵造二階建棧瓦葺

八島家は新町、町並み交流センターの斜向かいに位置するが、土蔵は敷地後背部にあり、銀山川越しに望見できる建物である。雨漏りによりケラバや軒周り、北側の壁土が崩落し、構造材は白蟻の被害を受けていた。修理は、傷みの激しい個所の壁土を落として腐朽した構造材を交換し、竹小舞に土を重ねて塗り上げる伝統的工法を用いた。外観は旧状と同じ土中塗り仕上げとした。

④波根田家土蔵 新町 (SiE3) 土蔵造二階建棧瓦葺

八島家土蔵の北隣に位置する土蔵である。かつての雨漏りは応急的に止められていたが、構造材は白蟻の被害を広範囲に受けていた。屋根葺替に加え、土壁を一部解体し傷んだ柱と梁の交換、補強を行ったのちに伝統的工法で土壁の補修を行った。

二階の天井は、棟を頂点とする曲線を描く船底天井で地区内では珍しく、小屋組みの腐朽材の取替えのため一度解体したが、原形に戻した。

(2) 温泉津地区

今年度、温泉津地区内では、4軒の修理、1軒の修景を実施した。主な事業は下記のとおりである。

①坂根家主屋 中町 (NN-06) 木造二階建瓦葺

中町の街道北側に位置する町家型住宅である。通り側の主屋は明治30年頃建てられており、大壁造本2階建てである。2階には袖壁を設け“ねずみ漆喰”で仕上げている。主屋の背後には中庭を挟

んで総2階の離れ家が配置され、典型的な町家型の住宅である。

修理は大屋根と下屋の屋根葺替え、壁は漆喰部の補修と西側妻壁側の構造補強、アルミサッシから木製戸に取替えた。

②西本家主屋 沖浦 (OW-10) 木造二階建て瓦葺

沖浦の通りに面している総2階建て真壁造の町家型の住宅である。大正15年4月の棟札が存在する。向かって右隣に同じ意匠で建っている建物があり、一見長屋のよう見えるが、それぞれ独立している。内部には箱階段、通り土間がよく残る。

修理は、屋根・壁の補修とアルミサッシを木製戸に交換した。

③さわのや旅館 上町 (KN-01) 木造三階建瓦葺

上町の街道北側に位置する湯治旅館である。建築年代は明治期。主屋背後は数回の増改築を経て屋根が複雑になり、雨水処理が悪いため風の強い雨天時は雨漏りがひどくなっていた。また、山の斜面を利用して昭和30年頃に増築した簡易鉄骨造の離れは、老朽化していたこともあり、今回の修理にあわせて撤去した。

修理は、屋根葺替、漆喰壁の補修、建具を交換し、構造材の一部を補強修理した。

③平野花月堂 中町 (NN-16) 木造二階建

中町の街道北側に位置する町家型で現在は店舗兼住宅である。建物の建築年代は昭和初期。当初は居宅(別荘)として建築された。空家になっていた家屋を平成になって内部改造し、菓子の製造販売として営業をはじめた。旧住宅の切妻の出入口、床間や天井などの内装を残した店舗となっている。

修理は主に入口の切妻屋根の修理と建具の調整を行った。また、古写真と痕跡を元に正面に板塀と庭を配置し、当初の外観に戻した。

⑤KAGURA新築修景 本町 (HN-03) 木造平屋建棧瓦葺

本町の最も温泉津湾よりの位置にあり、温泉津伝建地区において西側の入口付近にある。ガソリンスタンド跡地に、地区内にある土蔵を参考にして修景することとし、木造瓦葺漆喰仕上げの土蔵に下屋を付けた。また、既設自動販売機の前に格子を取り付け修景した。



修理中のさわのや旅館



八島家土蔵

2. 整備活用・情報発信事業

(1) サイン整備事業

平成13年度からの継続事業で、石見銀山遺跡及び周辺のサイン等の整備を行った。内容は、

- ①説明版の設置（木製看板6基）
- ②案内板の設置（1基）
- ③誘導版の設置（路面埋込式6基）

である。

設計監理委託業者：（株）空間文化開発機構

工事請負業者：（有）山崎組



(2) 遺跡整備事業

平成18年度から史跡保存管理計画の整備活用計画に基づき史跡整備事業に着手している。整備方針は、遺跡等とその周辺をとりまく自然環境を含めた地域全体を、いわば野外博物館の広大な展示空間とみなし、臨場感を持って遺跡等と接することのできる場を創出することを目的に、保存と活用の均衡、遺跡等と住民生活の調和を図ることとしている。文化庁国庫補助事業「史跡等総合整備活用推進事業」として実施し、事業費は164,300千円、概要は下記のとおりである。

1. 拠点施設整備

石見銀山遺跡全体の拠点施設については、大田市が整備主体となり、平成18年度から3ヶ年で整備することとなった。18年度は、正式に立地場所を決定し、建築基本設計及び用地造成工事等を完了したほか、建築工事に着手した。事業全体の概要は下記のとおり。

石見銀山遺跡拠点施設概要

項目	内容
場所	大田市大森町「市民ふれあいの森公園」地内
事業主体	大田市
事業費	約11億円（財源：国庫補助金、過疎債、県補助金）
機能	①ガイドンス機能 → 広範囲な遺跡を紹介する機能
	②調査研究機能 → 遺跡の全容を明らかにし価値を高める機能
	③保安全管理活用機能 → 世界遺産として保全、活用する機能
建物面積	約1,664m ² （屋外通路等を除く延床面積）
駐車場	約400台（大森銀山地区観光用駐車場を兼ねる）
運営体制	県市共同で運営する（職員約15名程度）
開設時期	平成19年夏 部分オープン（ガイドンス棟）
	平成20年春 全館オープン

2. 龍源寺間歩整備活用事業

一般公開している坑道の毀損した路盤の修理工事、崩落危険箇所への安全対策工事、照明設置工事を施工するとともに、高齢者や身障者の方の見学に配慮した旧坑道側溝の暗渠への変更、新坑道への手摺り、休憩用ベンチの設置を行った。また坑道入口前の通路のスロープ化や、出口側の便所に多目的便所を設置した。

3. 坑道等整備活用事業など

坑道入口の立入禁止柵設置、柑子谷地区のサイン施設設置、また19年度整備予定地の清水谷製錬所跡や本谷地区、柄ヶ浦鶴島などの地形測量図の作成などを行った。そのほか整備に伴う発掘調査を大久保間歩で実施した。

(3) 石見銀山協働会議

1. 「石見銀山協働会議」事業概要

世界遺産登録を目指す石見銀山遺跡を、民間と行政の協働により確実に未来へ引き継いでいくため、昨年度、「石見銀山協働会議」を設立し「石見銀山行動計画」を策定した。

本年度は、「石見銀山行動計画」に示された各種事業を実施した。

2. 「保存管理」

①保全活動体制整備事業

2006.5.23 民間団体と行政により「石見銀山維持・保全活動連絡協議会」を設立し、「クリーン銀山」を実施。

- ・「クリーン銀山温泉津日村地区」(〆06.7.30) 37名参加
- ・「クリーン銀山大森地区」(〆06.10.8) 80名参加
- ・「石見銀山世界遺産を守る森づくり」(〆06.12.10) 60名参加

②石見銀山ルール策定・普及事業

大森町自治会協議会と行政により「石見銀山ルール検討委員会」を設置し、「大森町住民憲章」「来訪者対策」「治安対策」などを検討。

第1回検討委員会(〆06.9.28)、第2回(10.16)、第3回(11.20)、第4回(12.6)、第5回(12.13)、第6回(12.27)、第7回(〆07.1.9)、第8回(1.15)、第9回(1.24)、第10回(2.14)、第11回(2.16)、第12回(2.21)

第1回大森町全体集会(〆07.1.28及び29)、第2回大森町全体集会(2.24)

3. 「活用」

①石見銀山ツーリズム企画事業／西田地区

民間団体「五郎之会」及び「ヨズクハデ保存会」のジョイントにより、「ヨズクハデ景観保全活動」を実施。

- ・「稲刈り及びヨズクハデづくり」(〆06.9.9) 60名参加
- ・「鳥根ふるさとフェアでのPR活動」(〆07.1.20～21)

②石見銀山ツーリズム企画事業／馬路地区

「馬路地区周遊マップ」を作製

③石見銀山ツーリズム企画事業／海から見た石見銀山

- ・「馬路地区」(〆06.8.26) 42名参加 (主催：柄の銀蔵)
- ・「宅野地区」(〆06.8.26) 20名参加 (主催：為山塾)

④銀の道ウォーク企画事業

- ・「銀山ウォーク温泉津沖泊道」(〆06.10.14) 82名参加 (主催：銀の道を歩く会)
- ・「銀山ウォーク尾道ルート」(〆06.10.24～28) 51名参加 (主催：銀の道を歩く会)

4. 「情報発信」

①石見銀山体験講座

・「石見銀山体験講座」(‘06.9.16~18) 25名参加 (主催：NPOしまね歴史文化ネットワークもくもく)

②石見銀山学習プログラム事業

大田市が設置する石見銀山遺跡の拠点施設において運営する「学習プログラム」を策定するため、協働会議プランナーを中心にワークショップを実施した。

第1回ワークショップ(‘06.7.26)、第2回(8.29)、第3回(9.12)、第4回(10.2)、第5回(10.27)、第6回(11.28)、第7回(12.12)、第8回(‘07.1.12)、第9回(1.30)、第10回(2.13)、第11回(2.27)、第12回(3.13)、第13回(3.27)

③石見銀山ブランディング調査事業(国土交通省「全国都市再生モデル調査」受託事業)

石見銀山における「地域ブランドづくり」の方向性を検討するため、協働会議プランナーを中心に「石見銀山ブランディング準備委員会」を設置し、報告書を策定した。

第1回準備委員会(‘06.7.20)、第2回(8.2)、第3回(8.18)、第4回(9.1)、第5回(9.19)、第6回(10.5)、第7回(10.25)、第8回(11.8)、第9回(11.29)、第10回(12.18)、第11回(‘07.1.11)、第12回(1.25)、第13回(2.8)、第14回(2.22)、第15回(3.8)、第16回(3.15)、第17回(3.30)

・「先進地視察」長野県妻籠宿及び小布施町(‘07.3.2~4) 18名参加

・「ヒアリング調査」

④「石見銀山協働会議」全体会の開催

「石見銀山行動計画」の進捗状況や石見銀山遺跡の調査・整備状況を公表するため、全体会を開催した。

・「第5回全体会」(‘07.3.31) 会場：大田市町並交流センター

5. 「受入」

①石見銀山交通対策検討事業

石見銀山地域における来訪車両の交通対策のあり方について実験・調査を実施した。

・第1回交通実験(‘06.5.4~6)、第2回(8.13~15)、第3回(11.3~6)

(4) 国際シンポジウム

趣旨

石見銀山遺跡の価値については、昨年開催した「鉱山遺跡専門家国際会議」でも、港湾集落や町並み保存地区を含め、鉱山に関する遺跡と豊かな自然環境が一体となって文化的景観を形成している点が高く評価された。

今後はこの貴重な資産を適切に保存管理していく必要があるが、そのためには、地元に住んでいる私たちが、この遺跡のもっている価値を十分に理解し、保存や活用に携わっていかなければならない。

このため、鉱山遺跡の文化的景観の価値やその保存について、海外世界遺産の先行事例を比較、参考にしながら、石見銀山遺跡の保存に対する一層の理解を得るため、国内外の世界遺産や文化的

景観の専門家などを招いてシンポジウムを開催した。

・石見銀山遺跡国際シンポジウム「鉱山遺跡の文化的景観～石見銀山遺跡の未来を考える～」

日時：2006.5.28（日） 9:40～15:35

場所：島根県立男女共同参画センター「あすてらす」（大田市）

主催：島根県、島根県教育委員会、大田市、大田市教育委員会

後援：日本イコモス国内委員会、朝日新聞松江総局、毎日新聞松江支局、読売新聞松江支局、産経新聞松江支局、山陰中央新報社、中国新聞社、日本経済新聞社松江支局、共同通信社松江支局、時事通信社松江支局、新日本海新聞社、島根日日新聞社、NHK松江放送局、山陰中央テレビ、BSS山陰放送、日本海テレビ、テレビ朝日松江支局、エフエム山陰

（開会）【9:40～】

挨拶 島根県教育委員会教育長 藤原義光

（基調講演）【9:50～】

「世界遺産ブレナボン産業景観の保存管理について」 ジョン・ロジャー

「ランメルスベルク、創造が作り出した傑作」 ハンス・ゲオルク・デットメル

「文化的景観の評価と保全について」 黒田乃生

「石見銀山遺跡の文化的景観」 大國晴雄

（パネルディスカッション）【13:40～】

パネリスト

ジョン・ロジャー（イギリス・世界遺産「ブレナボン産業景観」プロジェクト責任者）

ハンス・ゲオルク・デットメル（ドイツ・ランメルスベルク博物館学芸員）

黒田乃生（筑波大学大学院人間総合科学研究科世界遺産専任助教授）

大國晴雄（大田市総合政策部石見銀山課長）

コーディネーター

稲葉信子（東京文化財研究所文化遺産国際協力センター国際企画情報研究室長）



調査ノート編

I 資料紹介

1. 石見銀山領における郷宿と下宿

中木紗友美

はじめに

石見銀山領の代官所が置かれた大森町には、代官所と村とを仲介した郷宿が存在した。

郷宿とは一般に、遠方の村役人や村人が公務・訴訟等のため代官所や藩庁へ出頭する際に宿泊した所で、城下町や代官所周辺にあったとされ、公事宿とも呼ばれた⁽¹⁾。郷宿、公事宿は単に宿泊する場所ではなく、訴訟やその他の公務における村役人の補佐などを行っていたとされる。

大森町の郷宿についても研究が進められている⁽²⁾が、同様の役割を果たしており、代官所と村方との間に存在して公務を遂行した中間支配機構的な存在として位置づけられている。特に、岩城卓二氏は、郷宿の収入源として賄代、利銀（利足）、人足賃が中心を占め、郷宿が宿泊もできる「宿」であった重要性を指摘し、村人の私的な利用が多く、個人的な利害関係にも影響されやすかったとしている⁽³⁾。

大森町における郷宿の起源として挙げられるのが、宝暦3年（1753）の「石見国郡中入用其外取斗御定書」⁽⁴⁾である。これは増加する郡中入用に対し、適切な入用と節約を行うことを目的に制定されたものであるが、この御定書によって初めて領内6組⁽⁵⁾に対し1軒ずつ郷宿が割り当てられ⁽⁶⁾、以後、大森町の「御定郷宿」は6軒と決まった。

しかし、史料を見ていくと、この6軒以外にも大森町に宿が存在したことがわかる。そこで、本稿では郷宿以外の宿に関する史料を紹介し、郷宿との関わりについて考えてみたい。

1 郷宿とその外の宿

宝暦3年（1753）、代官所から申し渡された「石見国郡中入用其外取斗御定書」によって、銀山領村々の郡中入用が具体的に取り決められ、以後の地方支配の基本となった。

前述したように、この御定書には郷宿に関する条項も含まれている。領内6組へ各1軒ずつの郷宿の割り当て、その賄代、郷宿から村へ出す飛脚賃や廻状等を送る際の経費などである。そしてこれらの取り決めに対し、「郷宿共右之趣堅相守、仲間者不及申、其外宿致候もの共、賄代定之外請取候歟、不宜儀有之候ハ、不隠置可申出、聞逃致間敷事」（下線部筆者、以下同様）と堅く戒められている。ここで「仲間」というのは郷宿一同を指すと思われるが、それ以外にも宿を営むものがおり、郷宿以外の宿の存在が否定されたわけではなかったようである⁽⁷⁾。

また、後の天保2年（1831）には「当郡中六組御定郷宿転変後、郷宿引受年暦、其外取調書」⁽⁸⁾という、大まかな郷宿の変遷を示す史料がある。

この中の「郷宿御礼順取調」とされた部分に、郷宿の大吉屋瀬平・木村屋七郎治などと並んで

「下宿 国助」、別の箇所には郷宿の木村屋七郎治・原屋条平とともに「下宿 清兵衛」という名前が見られる。これが宝暦3年の段階の「其外宿致候もの」と同じと考えるわけにはいかないが、大森町には郷宿と並んで、下宿と称される宿があったことがわかる。

では、この「下宿 清兵衛」「下宿 国助」とは何者だったのだろうか。

2 下宿

下宿と称される宿に関して注目したいのは文化12年（1815）のものと考えられる、次の史料①である。

史料①

(端裏書)「亥十一月十六日 郷宿下宿願事

郷宿一同」

乍恐以書付奉願上候

大森町

桧物屋 清兵衛

右清兵衛倅国助儀、下宿与唱、郷宿共より御願申上、出入人者差支之節者、同人方江別宿為致罷在候処、此度死去仕候ニ付、猶又私共熟談之上、以来清兵衛江下宿為致度奉存候間、右之段御聞濟被下置候様、一同奉願上候、以上、

亥十一月

木村屋七郎治他行仕代

村助 (印)

原屋 条平 (印)

大吉屋 瀬平 (印)

田村屋 故左衛門 (印)

田儀屋 三左衛門 (印)

肥後屋 周平 (印)

大森御役所

この史料は下宿と称する国助が死去したため、清兵衛に下宿を引き受けさせたいと郷宿一同が願っているものである。ここから、前章で見た下宿の国助と清兵衛は桧物屋という屋号を持っていたこと、清兵衛と国助が親子であることがわかる。

そこで、桧物屋に着目すると、以下のような史料が見つかった。

史料② 文化3年（1806）12月 郷宿一同申合書

…代官上野四郎三郎の借財一件⁹⁾に関連する郷宿一同による申合書。ここで、各組郷宿の6人（田儀屋・岡田屋・泉屋・吉田屋・田村屋・木原屋）とともに、桧物屋清吉が連署している。

史料③ 卯年（文化4年／1807）12月 各方取斗方再許覚書

…代官上野四郎三郎借財一件における各郷宿の動向を記した覚書。その冒頭で、手代林和吉宅へ郷宿が呼び出された様子が、「去々丑四月廿四日、林様宅江郷宿六人万兵衛留主清吉代勤被召出…」と書かれており、郷宿吉田屋万兵衛留守のため、（桧物屋）清吉が出ている。

史料④ 辰年（文政3年／1820）5月 備後国上下村百姓万右衛門酒造願一件破談届

…上下村万右衛門の酒造願に関して、同村酒造人米太郎との訴訟吟味中の史料。

「…双方一村内ニ而彼是申争、及出入候而者、幾々不和合之基与奉存、宿条平・清兵衛立入、村役人俱々得与異見差加へ…」と条平と清兵衛が村役人と共に訴訟の仲介をしている。

この書状差出人としても原屋条平と桧物屋清兵衛が連署している。

史料⑤ 文政4年（1821） 村浦諸書附郷宿諸用留⁽¹⁰⁾

…久利組郷宿田儀屋による御用留。

「一、正月廿四日、松代村喜三兵衛より久利村茂兵衛へ掛り、貸銀滞御訴訟被致候ニ付、ひものやへ変宿為致候、」（※松代村と久利村はともに久利組）

史料⑥ 未年（天保6年／1835）11月 備後国西中条村百姓出森につき届書

…西中条村から訴訟当事者の百姓が来たことを「大森町郷宿健助」（＝大吉屋）と「右宿久米太郎」が届け出ている。

史料①～⑥には、桧物屋国助・清兵衛や清吉・久米太郎といった名前が出てくる。桧物屋国助・清兵衛が親子であることは先に述べた。また、寛政12年（1800）6月の桧物屋清吉銀子借用証文によれば、「銀子借人 桧物屋清吉、同 同人兄 清兵衛」とあることから、桧物屋清吉（史料②、③）は清兵衛の弟、文化14年（1817）11月の桧物屋清兵衛銀子借用証文では「本人 桧物屋清兵衛、同俵 久米太郎」とあるので、久米太郎（史料⑥）も清兵衛と親子であることがわかる。

つまり、下宿という呼称がなされるのは第1章で取り上げた天保2年（1831）「当郡中六組御定郷宿転変後、郷宿引受年曆、其外取調書」で、「前沢様より阿久沢様御支配中」のころとして出てくる「下宿 国助」が今のところの初見であり、これは文化7年（1810）から文化12年（1815）頃⁽¹¹⁾のことであるが、国助より前の桧物屋清吉からすでに活動している様子（史料②、③）が見られる。そしてその後下宿は清兵衛、久米太郎と引き継がれていったのではないだろうか。

これまでの研究で大森の下宿について言及されたことはない。大坂町奉行所付近に所在した下宿については、奉行所の前で百姓や町人が呼び出しを待つ間、飲食した場所であり、宿とは言うが宿泊する場所ではなく、奉行所の前など特定の場所に屋敷を所持することで職分が成り立っていたところが郷宿とは違ってたとされ、郷宿（公事宿）とは違った側面が指摘されている⁽¹²⁾が、大森の下宿はどうだったのだろうか。

史料①～⑥より、以下のことが指摘できる。

- i 跡郷宿を決める主体は組村と言える⁽¹³⁾が、下宿を決める主体は郷宿である。（史料①）
- ii 郷宿一同が大森御役所へ願書を出していることから、下宿は公的な存在だった。（史料①）
- iii 郷宿一同申合書には郷宿6人と桧物屋清吉だけが連署しているので、下宿は桧物屋1軒のみ。（史料②）
- iv 史料③の上野代官借財一件に関連して、郷宿吉田屋の代理として桧物屋が出ていることから、郷宿の代役もできるような役割が期待されていた。
- v 郷宿とともに、宿や仲介役として村々の訴訟に関与。（史料④、⑤、⑥）

以上の諸点より、下宿は郷宿の予備的な存在としての機能を果していたと考えられ、先行研究で

明らかにされている大坂町奉行所付近の下宿と同じものとは言えないだろう。

特に史料①では「出入人者差支之節者、同人方江別宿」のため相続させたいと郷宿一同が願い出ており、郷宿にとって必要な存在であったことがうかがえる。これは郷宿が村々の手賄⁽¹⁴⁾に対し、時に厳しい態度を取ることがあったことと対照的である⁽¹⁵⁾。

ただし、史料①では訴訟人に差支えがある場合に桧物屋へ移るとしており、史料⑤などでは訴人が相手方かわからないものの桧物屋へ転宿しているが、訴訟当事者の片方が他組の郷宿へ転宿する場合や双方が別の郷宿へ転宿する場合など⁽¹⁶⁾もあり、必ずしも桧物屋へ移るわけではなく、その条件はまだわからない。また、郷宿の代理として郷宿同様の職務を遂行できる能力があるにもかかわらず、郷宿にならなかったのはなぜか、下宿が史料上確実に存在していたのは19世紀前半であるが、代々下宿を受け継いだ桧物屋とはどういう家だったのかなど、今後さらに追究が必要である。

おわりに

本稿では、郷宿とは別に下宿という宿が存在したことを指摘し、郷宿との関わりを示す史料を紹介した。

ここでは触れなかったが、第1章で取り上げた宝暦3年(1753)「石見国郡中入用其外取斗御定書」の作成者の中には大森町役人、郷宿、銀山役人などと並んで、町宿の三右衛門、宗八という人物が連印している。それと直結するものではないだろうが、後の弘化元年(1844)、銀山町宿を正式に大吉屋に定めるという書状も残されており⁽¹⁷⁾、郷宿とは別に銀山町宿があった可能性も考えられるだろう。

- (1) 特に江戸、大坂を中心に研究が進んでいる。荃田佳寿子「内済と公事宿」(『日本の社会史5 裁判と規範』岩波書店、1987)他。
- (2) 岩城卓二「『御用』請負人と近世社会」『国立歴史民俗博物館研究報告』第47集、1993)、原宏「石見銀山御料の大森町郷宿と郷宿田儀屋文書について」(『島根県文化財調査報告』第9集 島根県教育委員会、1974)、松尾登「石見銀山領の地方行政と郷宿」(『郷土石見』No31、1992)他。
- (3) 岩城卓二氏前掲論文、註(2)
- (4) 熊谷家文書他。以下、史料の出典について特に明記しない場合はいずれも熊谷家文書による。
- (5) 銀山領は17世紀後半、地方支配の一環として村々が6組(波積、大家、久利、佐摩、九日市、大田)に編成された。(『温泉津町誌 中巻』1995年、p.95)
- (6) このときの「御定郷宿」は泉屋甚右衛門(波積組)、京屋元五郎(大家組)、田儀屋清六(久利組)、岡田屋嘉平太(佐摩組)、田村屋藤三郎(九日市組)であり、残る大田組は「組中手賄(=註(14)参照)」となった。
- (7) もちろん、宝暦3年に定められた「御定郷宿」は宝暦3年以前から宿を営んでいたであろうし、その他に何軒かの宿もあったと考えられる。宝暦3年より約10年前の寛保2年(1742)の家屋敷売渡証文では「郷宿岡崎屋和吉」の家屋敷が売買されているし、『温泉津町誌』によれば、郷宿の6組6軒制の前身は享保9年(1724)に置かれた宿屋惣代であったとしている。(『同 中巻』p.99、100)
- (8) 郷宿田儀屋文書。『島根県文化財調査報告』第9集に一部が翻刻されている。(註(2)参照)

- (9) 文化元年(1804)に着任した上野代官が銀山領内村々の重立衆68人からの借銀を返済せず、大きな問題になった事件。(『温泉津町誌 中巻』p.105~106)
- (10) 慶応大学所蔵石見銀山関係文書
- (11) 代官前沢藤十郎は文化7~10年、阿久沢修理は文化10~文政4年の着任であり、文化12年には松物屋国助が死去していると考えられる(史料①)ため。
- (12) 岩城卓二「近世中後期の村社会と郷宿・用達・下宿」(藪田貫編『民衆運動史3 社会と秩序』青木書店、2000)
- (13) 郷宿を決める際には「跡郷宿早々取極候様、村々示談仕候」、「此度村々熟談之上」などとされている。(文化7年(1810)6月「佐摩・波積・九日市組、勘左衛門外式人跡郷宿之儀ニ付、村々願出」、享和2年(1802)「郷宿博多屋藤十郎跡郷宿之儀ニ付、大田組惣代共より差出候書付類入」)
- (14) 村内部の者が大森に在住して、あるいは何人かが交代で大森に詰めて、郷宿と同様の職務を果たすこと。
- (15) 文政3年(1820)、郷宿6人は九日市組の内8ヶ村手賄の片山村謙助に対し、「同人儀者郷助(=謙助親、片山村先庄屋)与違ひ、村役ヲ茂不相勤身分」であり、8ヶ村惣代として宿をさせるのは「自然御定郷宿同様之姿ニ相成候段、歎ヶ敷奉存」、「職外之者勝手次第郷宿仕候而者、第一先年御伺済ニ而被仰渡候御趣意相背」くことだと非難している。
- (16) 天保14年(1843)には湯谷村心光寺と北佐木村斧作の訴訟において、心光寺が都屋から田儀屋へ、斧作が都屋から大吉屋へ転宿している。
- (17) 弘化元年2月 銀山町宿届。また、上野利治氏蔵文書にも銀山町宿に関連する史料があるという。仲野義文氏の御教示による。

2. 石見銀山遺跡昆布山谷地区の出土銭貨について

目次 謙一

本稿では、明治20年以降大正期にかけて大森鉱山を経営した藤田組の関連史料から、一石経を伴う中世銭の出土事例を新たに紹介する。

1. 史料概要

当該史料⁽¹⁾は縦帳で、「藤田組」銘の罫紙多数をつづる。大きさ24.0×16.5cm、厚さ6.4cm。丁数は不明。表紙・裏表紙とも残り、罫紙を含む全体に虫損もほとんどなく、良好な状態である。

表題に「要書録」等々あるとおり（図版1）、本史料は藤田組のいわゆる業務日誌である。その記載期間は明治19年9月から同22年1月までで、本稿が対象とする明治20年4月12日の記事も含む。主な内容は鉱山経営にかかる書面類の控えや各種記録類であって、藤田組による大森鉱山経営の実態をうかがい知ることが可能な、貴重な史料と評価できよう。本文は複数の人物によって書き継がれており、現状の形態へは記載期間終了後に取りまとめられたと考えられる。こうした性格上、上記の期間の前後にも何冊か同様にまとめられているが、詳細の検討は別稿を待ちたい。

本史料は大田市大森町の上野家所蔵文書の一つである。同家の故上野虎次郎氏は大森鉱山事務所長として長年勤務し、そのためか藤田組関連史料がまとまって保管されていたようである⁽²⁾。

2. 翻刻

本史料中ここで翻刻する部分は、A「遺失物掘得ニ付御届」（図版2～4：2丁分）とB「小銭文字種類及小石梵字取調書」（図版5～6：1丁半分）とに分かれる。ともに昆布山谷地区での坑道掘削作業中の銭貨発見について、明治20年4月12日付けで現地代理人大原順之助から大田警察署大森分署へ差し出された書類の写しである。以下、表紙・A・Bの順に翻刻文を掲載する。旧字は新字に改め、読点（、）を新たに付した。未解読の字は■で表した。

（表紙）

十九 九
自明治三十年四月

至 同 廿二年一月

要書録

永年保存（印）

（A）

遺失物掘得ニ付御届

一素焼壺 壺個

壺中旧藏品左ニ

- 一古錢九拾貳文
- 一梵字入小石拾三文
- 一瓦器破損壹個

右ノ品、本月八日午後三時、当郡佐摩村銀山字昆布山谷鉸業借区許可地内、新坑口豎六尺巾四尺ニ開鑿致候処、坑口ヨリ延貳拾壹尺ニテ左傍土上ヨリ貳尺許リノ処ニテ、斜形ニ押■致候分堀取致候処、古往数百年ノ遺物ニ可有之、壺ノ木蓋ハ自然朽腐シアルヲ以テ壺中■査致候処、前記ノ通り旧藏有之候ニ付、其来歴及埋藏ノ事实等探究致候得共、一向ニ瞭然不致次第ニ御座候、依テ現物并ニ略図相添ヘ此段御届申上候也、

石見国迹摩郡佐摩村銀山借区鉸業人
 広田義二郎代理

明治廿年四月十二日 大原順之助

島根県大田警察署
 大森分署御中

古錢内訳

永樂通宝拾九文 開元通宝五文 洪武通宝四文
 景元通宝五文 皇榮通宝貳文 元通々宝三文
 元豊通宝四文 元樂通宝三文 紹元通宝四文
 政和通宝二文 天元通宝三文 宣徳通宝壹文
 治元通宝壹文 文字不明分三十六文

計九拾貳文

(B)

小錢文字種類及小石梵字取調書

- 一小錢九拾貳文

内 訳

永樂通宝貳拾文 治平通宝壹文 治平元宝壹文
 景祐元宝 貳 文 景德元宝三文 皇宋通宝拾文
 元豊通宝 七 文 元祐通宝四文 熙寧元宝四文
 紹聖元宝 三 文 紹定通宝壹文 洪武通宝四文
 政和通宝 貳 文 開元通宝六文 天禧通宝壹文
 紹熙元宝 壹 文 天元通宝三文 至和元宝壹文
 宣徳通宝 壹 文 宣和通宝壹文 大觀通宝壹文
 嘉祐通宝 壹 文 祥符元宝壹文 明元通宝壹文
 元符通宝 貳 文 文字不分明拾文

- 一梵字小石廿九個

内 訳

㊦ノ字記載之石壹個 ㊦ノ字分貳拾個

無文字ノ分八個

右之通御座候也、

明治二十年四月十二日 大原順之助

大田警察署

大森分署御中

3. 考察

まず、Aから銭貨及び共伴遺物の出土状況を確認しておく。

A・Bより数日前の明治20年4月8日午後3時、佐摩村銀山（現大田市大森町）の昆布山谷では、新しい坑道の掘削が行われていた。おそらくは水平方向であろうか、断面規模縦1.8×横1.2mほどの坑道を6.3mばかり掘り進めたところ、左側壁の天井から約0.6m下がった位置で、壺1個が斜めに押し込まれた状態で発見された。壺の蓋は木製のため腐っており既に無かったようである。素焼きの壺1個の中には、古銭92文（枚）・梵字入り小石13文（個）・破損した瓦器1個が入っていた。なお、Bによると小石の個数は29個となっている。

以上の出土状況は、この壺が本来の埋蔵遺構とは全く無関係に発見されたことを示唆していよう。しかし、壺内部にあった百枚近い銭貨が縞状だったかを含め、詳細な出土状況は不明である。出土遺物を警察へ届け出る際には図面も作られたが、残念ながら現在ともに確認できていない。

こうして発見された銭貨多数については、A・B二通りの銭種記述が残されている。双方の比較結果をまとめた表1によると、AよりもBが確実に銭文を読解し分類していることが明白であろう。銭種不明分の割合もAが92枚中36枚（39%）なのに対し、Bでは10枚（11%）へと大きく減少している。小石の記述もBがより詳しいことは言うまでもない。A・B間の事情は定かでないものの、A提出後に警察側から改めて要請があって、Bが作成されたものと推測される。

そこで、本事例の銭種構成をBによって検討する⁽³⁾。文字不明分と銭文誤読分を除くと、唐銭の開元通寶から最新銭である明銭の宣徳通寶（初鋳1426年）まで、24種計81枚となる。このうち北宋・南宋を合わせた宋銭が47枚（58%）と最も多い点は、全国の大量出土銭とも共通する。同様に、枚数上位5位までの銭貨全てが、全国の大量出土銭における枚数上位11種に含まれている⁽⁴⁾。本事例の特徴は、永樂通寶が単独で20枚（25%）と他の銭種より抜群に多い点にあらう。天元通寶は、日本国内で14世紀代（1330～1380年）に集中して鋳造された島銭の一つである。15世紀に入ると流通から徐々に消えていったとされるため、本事例に複数枚含まれている点は注目されよう⁽⁵⁾。

こうした様相を大量出土銭的な性格の反映としてとらえ、永井久美男氏による時期区分⁽⁶⁾にあてはめてみる。すると、本事例は最新銭を宣徳通寶とする第6期に比定でき、その年代も15世紀第2四半期から16世紀第3四半期と推定される。なお、波根遺跡（現大田市波根町）でも銭貨6,747枚が一括して出土しており、最新銭は宣徳通寶である⁽⁷⁾。

ただ惜しむらくは、本来考古学的な年代観の判断材料となる、共伴遺物群から全く情報が得られない点である。今後、関連文献史料の精査により、「現物并ニ略図」の発見や出土地点の特定など新たな事実が解明されることを期待したい。

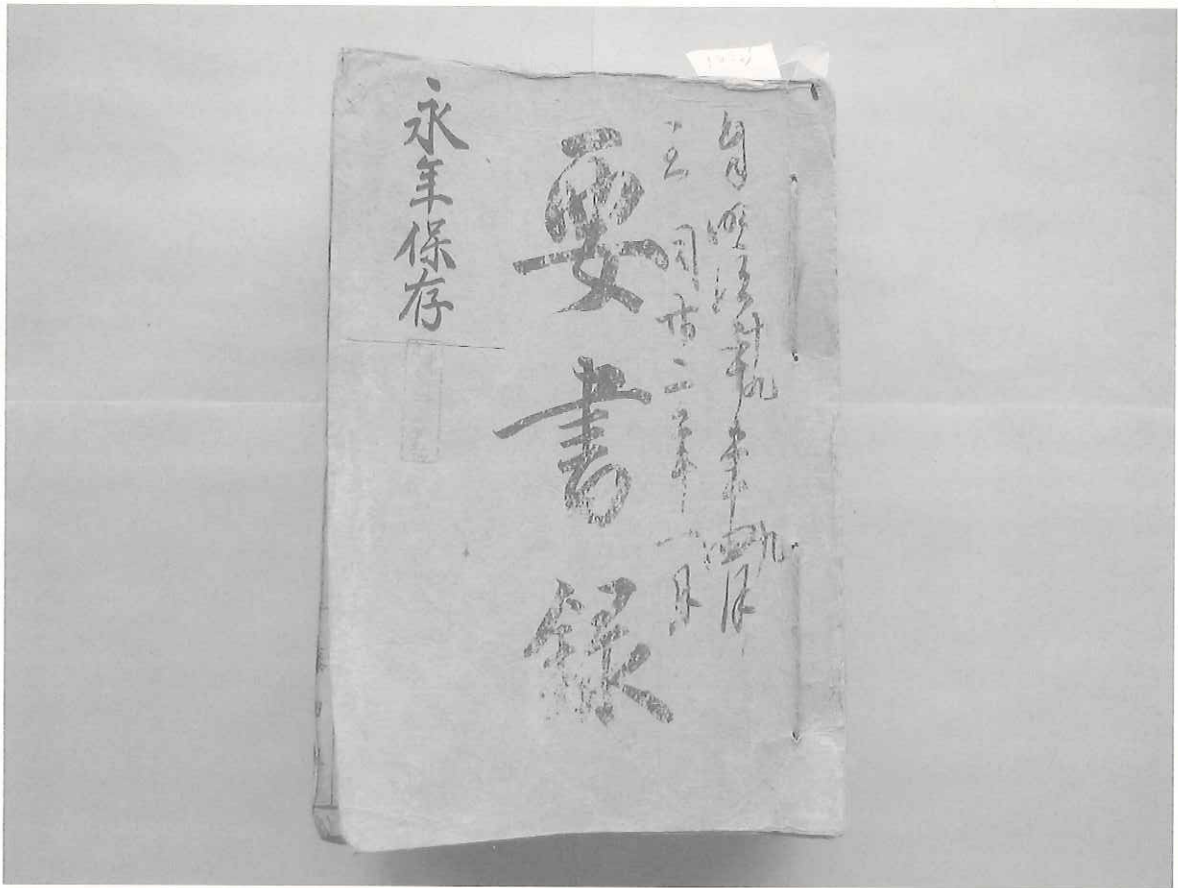
本事例ではまた、梵字を記すものを含む小石計29個が壺に入っていたことが注目される。その内訳は孔字1個・孔字20個・文字無し8個で、小石・壺ともに大きさの記述はない。これらは一石経と考えられ、本遺構が経塚であったことをうかがわせる。

鳥根県下における一石経と銭貨を共伴する経塚の事例として、松江市岩汐峠経塚⁽⁸⁾・大田市南八幡宮鉄塔⁽⁹⁾・益田市水分経塚A経塚⁽¹⁰⁾が挙げられる。岩汐峠経塚では、一字一石経を並べた方形壇において、小石の間から銭貨6枚が出土している。水分経塚A経塚では土坑に木箱を入れて埋納したものと推測され、その底部には93枚の銭貨が束ねてあった(出土総数は107枚)。南八幡宮鉄塔では内部の石製筒に経筒・経石・700枚近い銭貨等が納められている。本事例の出土状況は以上のいずれとも異なっているため、鳥根県下での一石経を伴う経塚について新たな形態を加えるものと言えよう。一方で、水分経塚A経塚の最新銭は宣徳通寶であり、出土枚数も比較的近い。この共通点は、本事例の歴史的な性格を考えるうえで重要な要素と言うべきであろう。

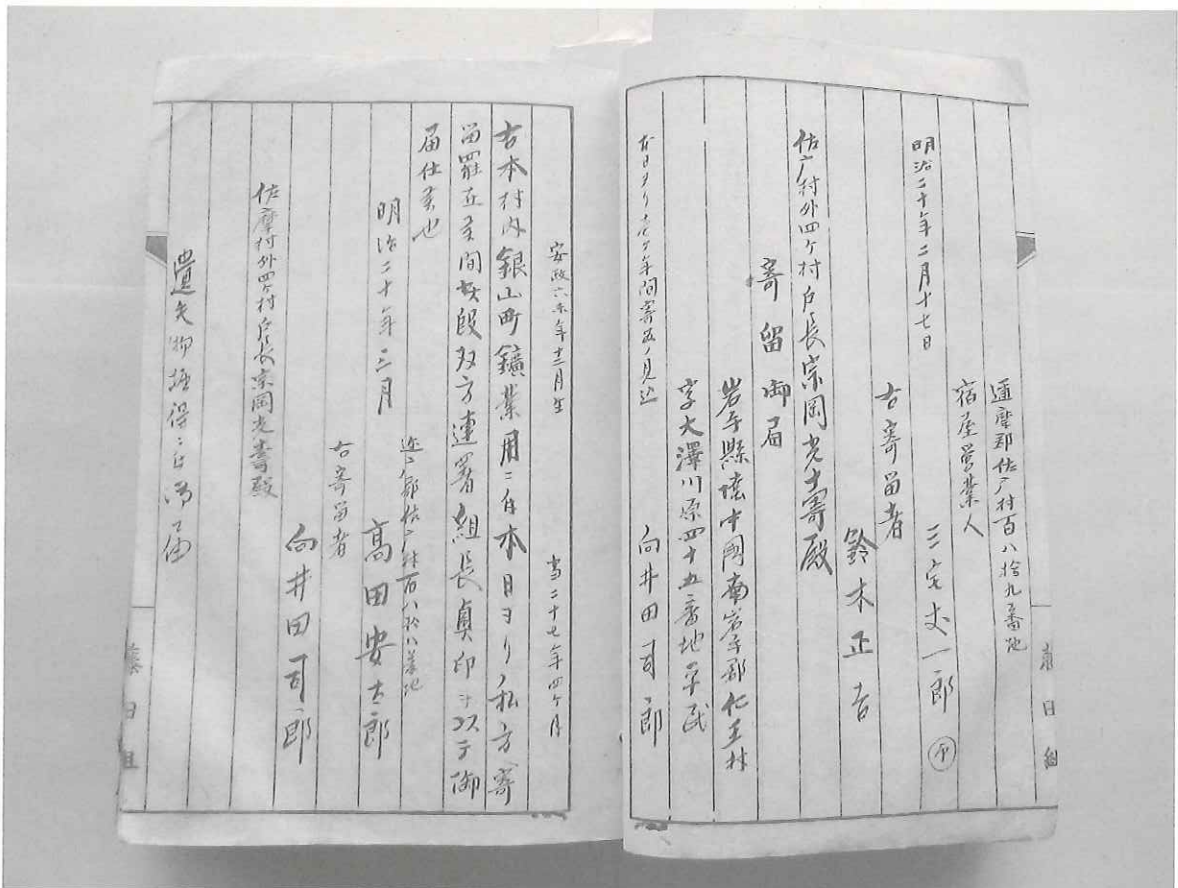
翻って、出土地点である昆布山谷には、山林の中に多数の平坦面や石造物群、複数の寺院跡が残されている。すなわち、昆布山谷が一面では宗教的性格も帯びる地域であった点が留意されよう。本事例の存在は、銭貨や一石経を一括埋納し経塚とする、宗教行為が行われた事実を示している。したがって、本事例の年代を考慮するならば、昆布山谷の宗教的性格の淵源は石見銀山が本格的に開発され始めた16世紀前半からさかのぼり、15世紀代となる可能性もあるのではないか。わずか一例のみで論じるのは危険だが、本事例は、石見銀山の開発前史や昆布山谷地区の歴史の変遷を検討する際にも、注目すべき銭貨出土例として評価できると考える。

註および引用文献

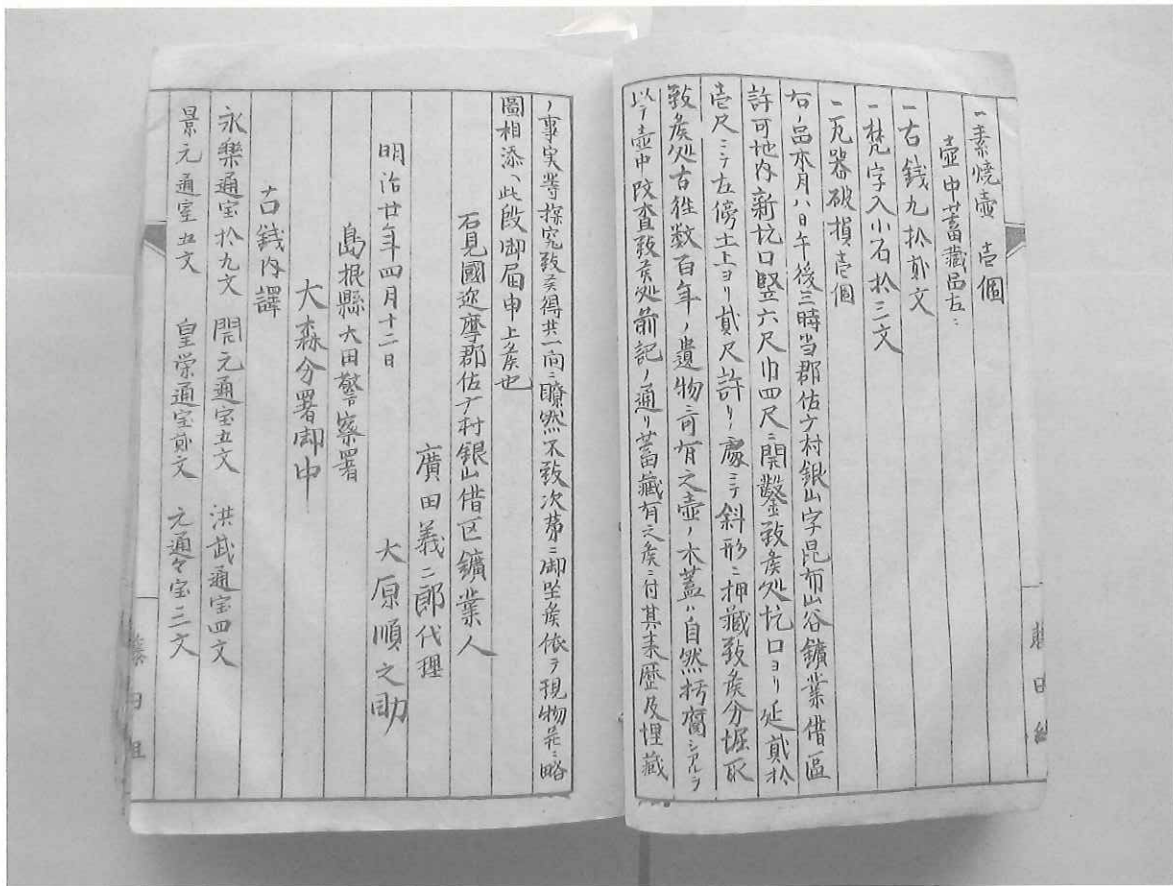
- (1) 上野家文書。史料閲覧にあたって遠藤浩巳氏に種々ご配慮いただいた。記して感謝する。なお、近年には鳥根県教育委員会および石見銀山歴史文献調査団による同文書の調査・目録作成が行われており、その際本史料には「13-4」という整理番号が与えられている。
- (2) 岩屋さおり「近代の石見銀山 - 大森鉦山時代の経営・労働・生活 -」『石見銀山関係論集』鳥根県教育委員会 2002
- (3) 翻刻文を除く本文中では、銭種名称に銭文記載の文字を使用している。
- (4) 鈴木公雄「表7 出土備蓄銭種総順位」『出土銭貨の研究』pp.80 東京大学出版会 1999
- (5) 永井久美男『新版 中世出土銭の分類図版』高志書院 2002
- (6) (5)に同じ
- (7) (5)に同じ
- (8) 江川幸子「岩汐峠遺跡」『松江市文化財調査報告書』72 松江市教育委員会 1996
- (9) 近藤正「大田市南八幡宮の鉄塔と経筒について」『鳥根県文化財調査報告』3 鳥根県教育委員会 1970
- (10) 木原光「益田・水分経塚」『鳥根県埋蔵文化財調査報告書』X I 鳥根県教育委員会 1985



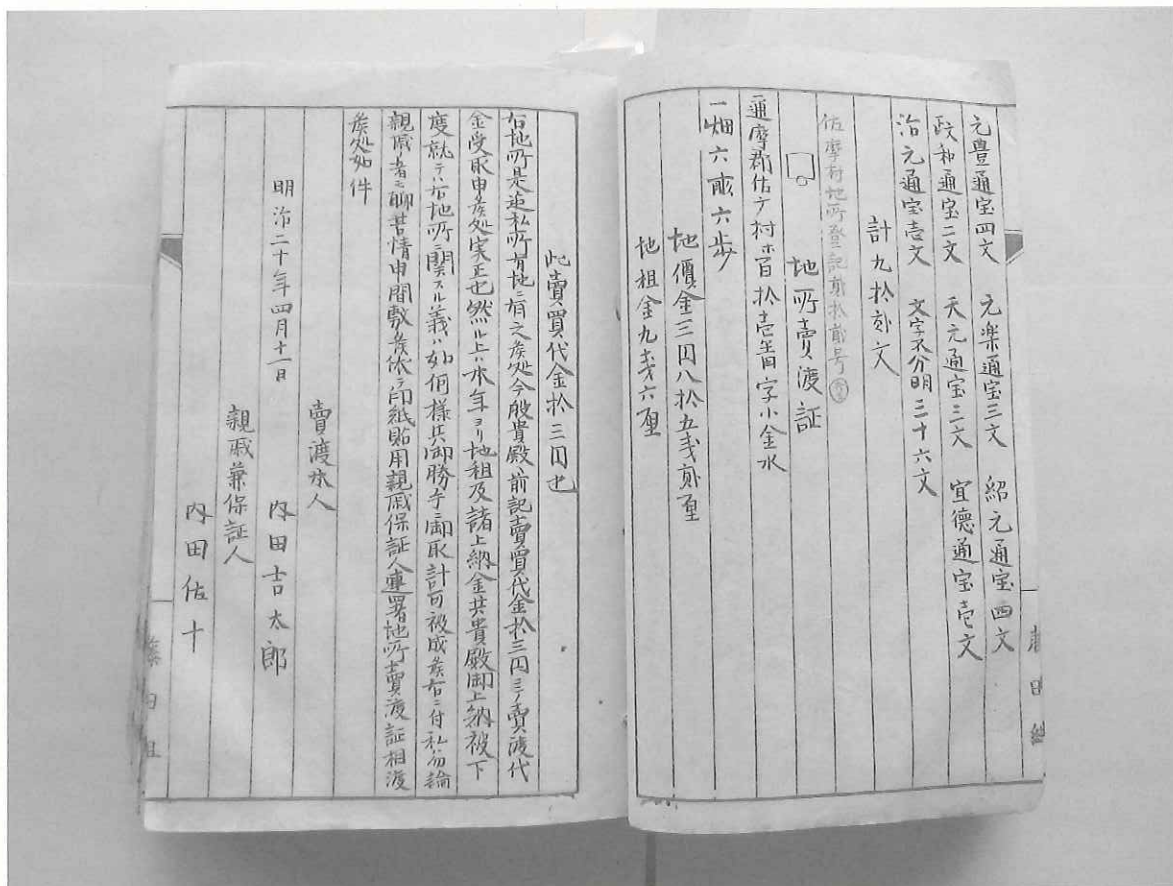
図版1 表紙



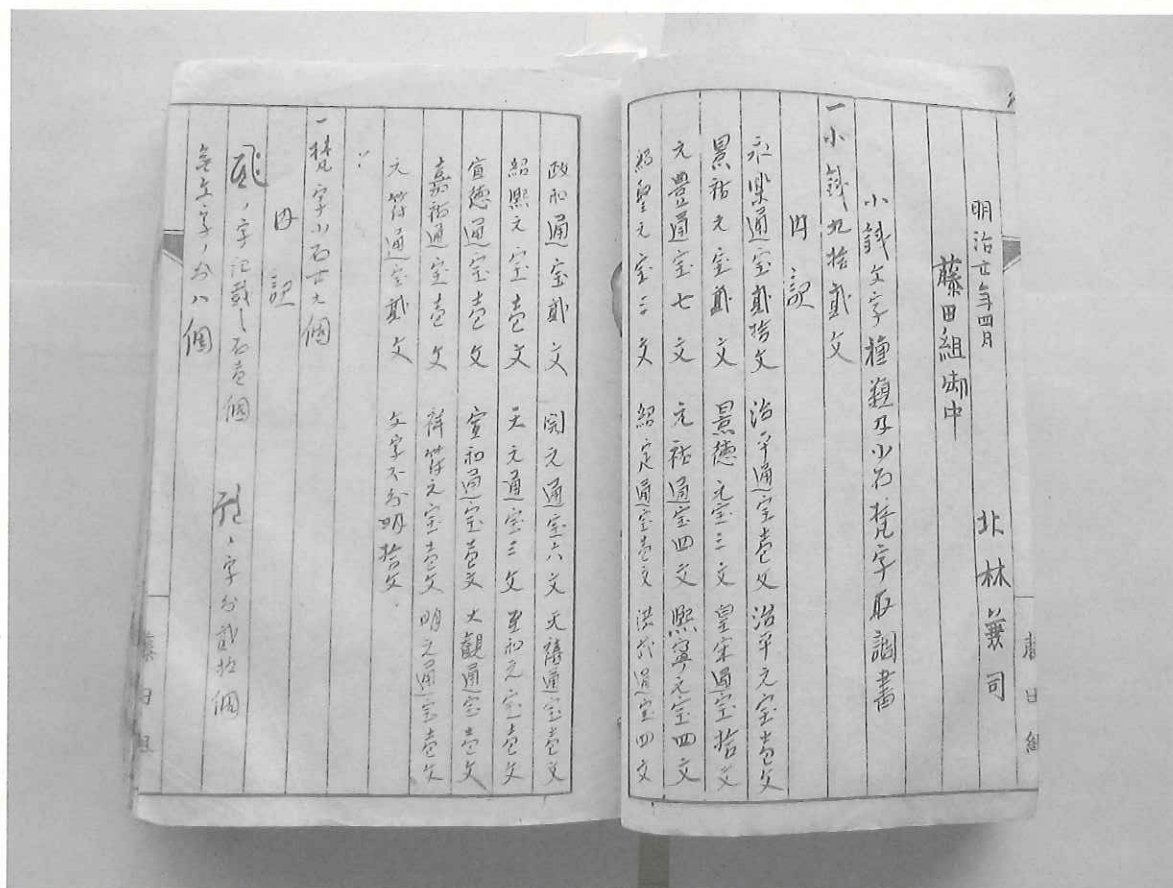
図版2 遺失物掘得二付御届 (1)



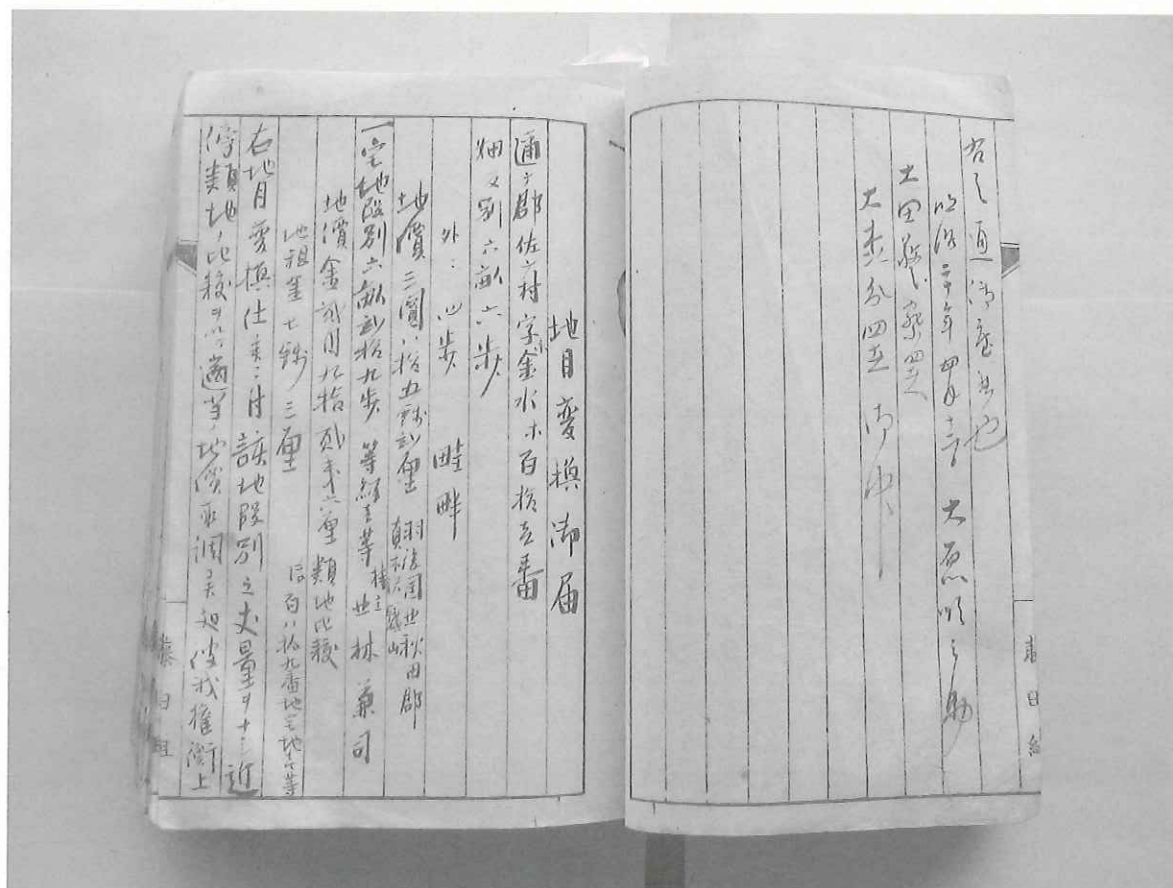
図版3 遺失物掘得二付御届 (2)



図版4 遺失物掘得二付御届 (3)



図版5 小銭文字種類及小石梵字取調書 (1)



図版6 小銭文字種類及小石梵字取調書 (2)

3. 矢筈城跡表採資料について

田原 淳 史

はじめに

今回紹介する資料は矢筈城跡において表採された磁器である。この資料は平成18年9月に実施された国際記念物遺跡会議（ICOMOS）による調査に先立ち現地の確認に赴いた折、猪等の獣により荒らされた曲輪部分より出土していたものである。いずれも小片ではあるが、矢筈城に関する数少ない資料であり、ここで紹介することとしたい。

矢筈城の概要

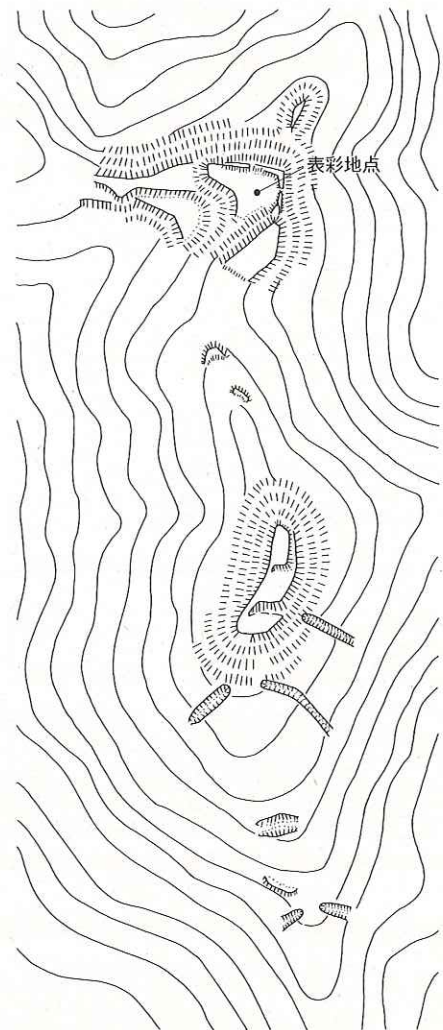
矢筈城は石見銀山遺跡柵内の東、大田市温泉津町と仁摩町との境に位置している。標高約480mの急峻な丘陵上に築かれた山城で、頂上部に2箇所の曲輪群のほか土塁や堀切・豎堀等が確認できる。

矢筈城の北側には北の冠集落と南の机原集落とを結ぶ道が、また南側には石見銀山から西田の集落を通り温泉津の湊へと続く、石見銀山産出の銀を輸送するのに使用されたとされる道が通っている。この城はそれらを押さえる軍事的役割を担っていたものと推測され、石見銀山を押さえる上で重要な意味を持っていたものと考えられる。

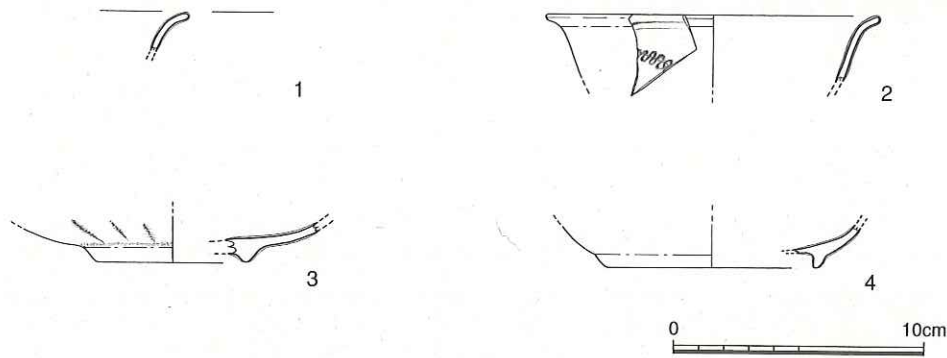
矢筈城の名が文献上に登場するのは1556（弘治2）年の



第4図 矢筈城の位置



第5図 矢筈城平面置図



第6図 表採遺物実測図 (S=1 / 3)

ことである。この史料には毛利軍の攻撃を受けた尼子方が矢筈城から撤退したという内容の記述があり、少なくともこの時期までには矢筈城が存在していたことが伺えるが、それより以前についてはこれまでのところ記録はなくいつごろの築城かは明らかでない。

表採遺物の概要

今回表採した遺物は全部で8点である。内訳は白磁が5点、青磁が2点、残る1点が青花である。このうち器形の推測できるものは4点あり、以下にその概要を記す。

1は白磁である。破片が極めて小さいが、端反の皿の口縁部と考えられるものである。2は青花である。口縁端部は反り、内面には回線が巡らされている。3は青磁である。皿の高台と考えられるもので置付は露胎、体部は型押しによる花卉状を呈する。4は白磁である。皿の底部と考えられるもので、高台は直立して立つが細い。

これらの年代については、これまでの研究成果から、16世紀のものと考えられる。

まとめ

以上、矢筈城跡において表採した磁器片についてその概要を記した。いずれも小片のうえわずか8点の資料であり、これらの年代がそのまま矢筈城の年代を示すものと捉えることは控えなければならない。しかし、これまでに考えられてきた年代と大きく異なるものでもないことから、矢筈城についての年代的な研究を進めていく上で注目のされる資料と言えよう。

註

(1) 島根県教育委員会『石見銀山街道—鞆ヶ浦道・温泉津沖泊道調査報告書』2004. 3

(2) 島根県教育委員会、大田市教育委員会、温泉津町教育委員会、仁摩町教育委員会
『石見銀山—城跡調査・石造物調査・間歩調査編』1999. 3

(3) 弘治二年八月九日 毛利元就書状

(前略) 山吹衆敵数輩討捉由候、左候間、三久須、矢筈、三ツ子巳下敵城、悉退散之由候 (後略)

(4) 森田 勉「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究No2』1982

小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No2』1982

なお、西尾克己、守岡正司の両氏にも助言いただいた。記して感謝する。

II 報告書・出版物情報（2006.4～2007.3）及び補遺

1. 調査報告書・記録集

- ・『鉾山遺跡の顕著な普遍的価値と保存管理に関する専門家国際会議 報告書』日本語版・英語版（文化庁・島根県）
2005年6月1日～4日、島根県大田市で行われた「鉾山遺跡の顕著な普遍的価値と保存管理に関する専門家国際会議」の報告書。
- ・『石見銀山遺跡国際シンポジウム「鉾山遺跡の文化的景観～石見銀山遺跡の未来を考える～」報告書』（島根県教育委員会、2007.3）
2006年5月28日、島根県大田市で開催された国際シンポジウムの報告書。
- ・『石見銀山遺跡科学調査報告書（3）平成13年度～17年度』（島根県教育委員会・大田市教育委員会、2007.3）
平成13年度～17年度にかけて実施された科学調査の結果をまとめた報告書。
- ・『石見銀山遺跡発掘調査概要16 - 本谷地区・町並みの発掘調査』（島根県教育委員会・大田市教育委員会、2007.3）
平成18年度に実施された本谷地区及び大森伝建地区内の発掘調査の概要をまとめた報告書。
- ・『石見銀山 石見銀山遺跡石造物調査報告書7 - 温泉津地区の石造物分布調査及び西念寺墓地悉皆調査（1）』（島根県教育委員会・大田市教育委員会、2007.3）
平成18年度に実施された温泉津地区の石造物分布調査の結果と西念寺の悉皆調査の結果をまとめた報告書。
- ・石見銀山歴史文献調査団編『石見銀山歴史文献調査報告書Ⅲ 安原備中関係史料集』（島根県教育委員会、2007.3.）
近世初期に釜屋間歩を開発し、石見銀山の最盛期の基礎を築いたとされる安原伝兵衛と安原家に関連する文献・棟札等の資料を集め、それぞれに解説をつけた。また、田中圭一が安原氏に関する総説を著した。
- ・『石見銀山遺跡調査ノート』Vol.6（島根県・大田市両教育委員会、2007.3.）
- ・「石見銀山遺跡ニュース」（島根県・大田市教育委員会）
第11号（2007.3.）
イコモス（ICOMOS）の石見銀山遺跡現地調査（足立克己）
石見銀山遺跡国際シンポジウムを開催（同）
総合調査から 発掘調査（新川隆・中田健一） 文献調査（目次謙一）

石造物調査（田原淳史）

第30回世界遺産委員会に参加して（佐々木慎二）

来訪者受入対策について 間歩現況調査（同）

「石見銀山行動計画」の行動状況（長嶺康典・松浦満）

重要文化財熊谷家住宅の公開始まる（林泰州）

町並みを歩く⑩～修理の現場から～ 大森銀山地区（三谷岳史） 温泉津地区（今田善寿）

石見銀山遺跡調査活動等日誌抄

- ・子ども向けパンフレット「ホントの石見銀山を知っていますか。」（島根県教育委員会、2006.3.）
- ・パンフレット（A4三つ折り）「石見銀山遺跡—世界に輝いた銀のまち」（島根県教育委員会、2006.1.発行、2006.3.改訂）
- 2. 個別論文・資料紹介・関連報告
- ・『重要伝統的建造物群保存地区 歴史の町並』平成18（2006）年度版（全国伝統的建造物群保存地区協議会、2006.5.）
- ・文化財保存全国協議会『新版 遺跡保存の事典』（平凡社、2006.5.）
「石見銀山遺跡 島根県」（遠藤浩巳）
- ・『開館プレ事業島根県立古代出雲歴史博物館移動展 新資料に見る石見の歴史』図録（島根県立古代出雲歴史博物館、2006.6.）
- ・いなとみのえ『石見銀山 四季 暮らし ものづくり』（織研新開社、2006.7.）
- ・山陰中央新報社編『輝き再び石見銀山 世界遺産への道 改訂版』（山陰中央新報社、2006.8.）
- ・頼祺一編『街道の日本史41 広島・福山と山陽道』（吉川弘文館、2006.8.）
- ・世界遺産登録推進室「世界遺産への歩み」（シリーズ）『季刊文化財』第112号（島根県文化財愛護協会、2006.10.）
- ・鳥谷芳雄「かなめ石のかなめについて」『季刊文化財』112（島根県文化財愛護協会、2006.10.）
- ・山陰中央新報社編『世界が求めた輝き 石見銀山 写真集』（山陰中央新報社、2006.10.）
- ・「特集 世界遺産登録へ動く自治体—地域振興に高いブランド価値が魅力」『日経グローバル』No61（日経産業消費研究所、2006.10.）

- ・『歴史をつくった先人たち 日本の100人No.36 毛利元就』（ディアゴスティーニ・ジャパン、2006.10.）
- ・内藤好文「史談往来／北から南から 石見銀山と甲州武田家臣の人脈と行跡」『歴史研究』48-10（歴研、2006.10.）
- ・本多博之『戦国織豊期の貨幣と石高制』（吉川弘文館、2006.11.）
- ・川村博忠「豊臣政権下毛利氏領国時代の石見国絵図—その内容と作成目的—」『歴史地理学』48-5（2006.12.）
- ・小泉和子「座布団百枚と“家の女たち”—石見銀山ゆかりの町で繰り広げられた“もったいない”女たちの手が重要文化財住宅を立ち上げた」『季刊銀花』147（文化出版局、2006秋号）
- ・伊藤ユキ子『石見銀山の港町 温泉津紀行』（ワン・ライン、2007. 2.）
- （補遺）
- ・目次謙一「石見銀山遺跡の出土銭貨について」『山陰の出土銭貨』（出土銭貨研究会、2004.9.）
- ・目次謙一「『中近世移行期の無文銭』の検討 出土銭貨研究会第11回中国大会報告」『出土銭貨』22（出土銭貨研究会、2005. 3.）
- ・八木正自「Bibliotheca Japonica(97)最近の話題 『石見銀山遺跡』世界遺産候補と『伊藤マンショの肖像画』発見」『日本古書通信』71-1（日本古書通信社、2006. 1.）
- ・本中眞「[最近の世界遺産一覧表への遺産登録に向けた取組について] 『紀伊山地の霊場と参詣道』登録時に付された勧告への対応と、『石見銀山遺跡とその文化的景観』の推薦について」『月刊文化財』509（文化庁文化財部／第一法規、2006. 2.）
- ・「[最近の世界遺産一覧表への遺産登録に向けた取組について] 『鉾山遺跡の顕著な普遍的価値と保存管理に関する専門家国際会議』における論点及び結論—石見銀山遺跡を事例として」『月刊文化財』509（文化庁文化財部／第一法規、2006. 2.）
- ・西本右子・目次謙一・佐々木稔「島根県出土極薄輪銭の化学組成と材質」『出土銭貨』24（出土銭貨研究会、2006. 3.）
- ・仲野義文「江戸時代における銀山町の人口動向と社会構成について」（『宗門改帳からみる山陰の近世社会』山陰宗門改帳研究会、2006. 3.）

- ・原芳人『石見の国大森銀山 無量山極楽寺縁起』（自費出版、2006.3.）
- ・松場登美「過疎の地域『石見銀山』に新しい“市場機会”を創りだす地域商人の生きざま」
『Value creator 価値創造者』250（オフィス2020新社、2006.3.）

3. シンポジウム・講演会等

[シンポジウム]

- ・石見銀山遺跡国際シンポジウム「鉱山遺跡の文化的景観～石見銀山遺跡の未来を考える～」
日時：2006年5月28日（日）9:40～15:35 於島根県立男女共同参画センター「あすてらす」
主催 島根県・島根県教育委員会・大田市・大田市教育委員会
基調講演（9:50～12:40）
「世界遺産ブレナボン産業景観の保存管理について」
ジョン・ロジャー（イギリス・世界遺産「ブレナボン産業景観」プロジェクト責任者）
「ランメルスベルク、創造が作り出した傑作」
ハンス・ゲオルク・デットメル（ドイツ・ランメルスベルク博物館学芸員）
「文化的景観の評価と保全について」黒田乃生（筑波大学大学院世界遺産専任助教授）
「石見銀山遺跡の文化的景観」大國晴雄（大田市総合政策部石見銀山課長）
パネルディスカッション（13:40～15:30）
「石見銀山遺跡の文化的景観の保存と活用～石見銀山遺跡の未来を考える～」
パネリスト 全講演者
コーディネーター 稲葉信子（独立行政法人東京文化財研究所文化遺産国際協力センター室長）

- ・金・銀・銅サミット in 島根（大田ロータリークラブ創立35周年事業）
日時：2006年5月14日（日） 於サンレディー大田
基調講演 「世界遺産から未来へ」澄田信義（島根県知事）
パネルディスカッション「鉱山遺跡を未来に活かす」
パネリスト 竹腰創一（島根県大田市長）
高野宏一郎（新潟県佐渡市長）
佐々木龍（愛媛県新居浜市長）
コーディネーター 村上隆（独立行政法人奈良文化財研究所上席研究員）

・2006年石見銀山体験講座

日時：2006年9月16日（土）～18日（月）

◎1日目

まちなみ見学 [大森町・重要伝統的建造物群保存地区]（石見銀山ガイドの会）

講座①「石見銀山遺跡と暮らし」（大田市石見銀山課）

夜学①ビデオ上映「世界遺産をめざす石見銀山」

◎2日目

遺跡ウォーク（大田市石見銀山課職員）

清水谷製錬所跡～龍源寺間歩～佐毘売山神社～仙の山～釜屋間歩～大久保間歩
まちなみ見学〔温泉津町・重要伝統的建造物群保存地区〕（石見銀山ガイドの会）
夜学②「遺跡調査報告」（大田市石見銀山課）

◎3日目

遺跡保全体験 沖泊港清掃ボランティア

公開講座「石見銀山と能～2つの遺産～」脇田晴子（城西国際大学大学院） 於サンレディー
大田

・シンポジウム「ここまでわかった石見銀山Ⅴ」

日時：2007年2月10日（土）13:30～16:30 於島根県立男女共同参画センター「あすてらす」

講演 「科学調査の最新成果について」村上隆（独立行政法人奈良文化財研究所）

報告 ①「本谷地区の発掘調査成果」中田健一（大田市石見銀山課）

②「釜屋間歩と安原備中」目次謙一（県教育庁世界遺産登録推進室）

③「協働により“世界遺産ブランド”を地域自らのものに！」

—石見銀山ブランディング調査事業 中間報告— 石見銀山ブランディング準備委員会
討論・意見交換 「世界遺産登録・調査研究・整備と公開」

・隠岐牧畑シンポジウム「後世に伝える隠岐牧畑の歴史的価値」

日時：2006年10月7日（土）13:30～16:10 於西ノ島町浦郷・中央公民館ノアホール

パネリスト 和田謙一（島根県教育庁世界遺産登録推進室長）

若松進一（愛媛大学非常勤講師、人間牧場主）

中上良英（元JA隠岐どうぜん組合長）

口村光房（西ノ島町文化財保護審議会委員）

コメンテーター 藤谷一夫（元 牧司）

川本 巖（元 牧司）

コーディネーター 高橋佳孝（近畿中国四国農業研究センター）

（補遺）

・県立広島大学開学記念リレーシンポジウム「大学と地域文化」

シンポジウム「巖島の歴史と文化—宮島の魅力再発見—」

日時：2006年2月4日（土）14:30～

基調報告「世界遺産巖島神社と石見銀山」秋山伸隆（県立広島大学人間文化学部）

[研究会等]

・科研費石見銀山研究会

「毛利氏支配下の温泉津と石見銀山—『石見石田家文書』と『吉岡家文書』を中心に—」本多博
之（県立広島大学）

日時：2006年7月29日（土）

- ・島根大学宍風祭研究室公開企画「『歴史の記憶』と文化遺産（国内遺産編）」

日時：2006年10月7日（土）、於島根大学法文学部多目的室

ポスターセッション（9:00～17:00）

調査報告会 第1部（10:30～12:00）

「石見銀山の機能と変遷」

「それぞれの時代における興福寺と春日大社の存在と意義について」

「祇園祭—受け継がれる伝統と記憶の変遷—」

同 第2部（13:00～14:30）

「近現代の大阪城～豊臣大坂城の影響～」

「琉球人の意識の問題について」

「広島平和記念公園に関する考察」

- ・第2回 石見銀山歴史文献調査研究会

日時：2006年12月17日（日）14:00～17:00、於大田市立図書館2階会議室

①「石見銀山御料の郷宿と宿」中木紗友美（県教育庁文化財課）

②「石見銀山周辺地域の産業～江の川流域のたたら製鉄と水運～」仲野義文（石見銀山資料館）

③「大森町の町役人と文書管理システム」小林准士（島根大学法文学部）

- ・石見銀山研究会（科研費・萌芽研究・山陰宗門改帳研究合同研究会）

日時：2007年1月14日（日）於島根大学多目的室

①「石見銀山と世界遺産金銀鉱山の比較研究について」佐伯徳哉（県教育庁文化財課）

②「『銀山町五人組改帳前書』に見る近世鉱山社会と法」仲野義文（石見銀山資料館）

③「石見銀山領の宗門別結婚率・出生率」廣嶋清志（島根大学法文学部）

④「櫻井家『召抱人』の構成—『明治式巳十月 召抱人別書出帳』（櫻井家文書）の分析—」

鳥谷智文（松江工業高等専門学校）

- ・第1回 山陰研究センター講演会

日時：2007年2月10日（土）13:30～、於島根大学教養棟

「近世石見銀山の経営と社会」仲野義文（石見銀山資料館）

[講演等]

- ・藤岡大拙「石見銀山の歴史と価値」（斐川・寿昌大学第1回講座、2006.6.13（火）、於斐川町中央公民館）

- ・目次謙一・田原淳史「石見銀山の銀生産について」（平成18年度中国四国支部YFE鑄造技術研究会、2006.9.1（金）17:30～18:45、於スカイホテル大田）

- ・佐伯徳哉「欧米の世界遺産銀山と石見銀山」(県立石見美術館歴史講座、2006. 7 .29 (土)、於島根県芸術文化センター・グラントワ講義室)
- ・多田房明「街道と港町の民俗―温泉津町と仁摩町での民俗調査から―」(石見銀山ガイド養成研修、2006.10. 2 (月))
- ・目次謙一「石見銀山遺跡の歴史と世界遺産登録」(島根県広告美術協同組合創立40周年記念式典、2006.11.24 (金) 14:50～15:50、於ホテル一畑サンシャインホール)
- ・佐伯徳哉「大航海時代の交易を証明する石見銀山～銀のジパングに魅了された世界の人々」(平成18年度外国語大学地域連携事業セミナー、2007. 1 .13 (土)、於大和ハウス工業株式会社梅田本社)
- ・本多博之(県立広島大学)「石見銀山と安芸厳島」(平成18年度町並みガイド養成講座、2007. 1 .28 (日)、於島根中央地域職業訓練センター)
- ・鳥谷芳雄「2007年世界遺産登録予定 石見銀山遺跡」
 - ①黒田交流会(2006. 4 .23 (日) 13:00～14:00 於松江市黒田町・黒田公民館)
 - ②平成18年度県立高等学校事務長協議会研修会(2006. 5 .26 (金) 10:00～11:30 於サンラポーむらくも2階「祥雲」)
 - ③平成18年度島根県立古代出雲歴史博物館出前講座(2007. 1 .28 (日) 10:00～11:30 於出雲市今市町・北本町ふれあい会館2階)

Ⅲ 平成18年度石見銀山遺跡調査等関係者

○石見銀山遺跡調査整備委員会

- 委員長 田中 琢 (元奈良国立文化財研究所長)
- 委員 田中 圭一 (元筑波大学教授)
- 委員 田中 義昭 (元鳥根大学教授)
- 委員 藤岡 大拙 (荒神谷博物館長)
- 委員 青柳 正規 (国立西洋美術館長)
- 委員 斎藤 英俊 (筑波大学大学院教授)
- 委員 高橋美也子 ((財)大田市体育・公園・文化事業団理事)
- 委員 牛川 喜幸 (元京都橘大学教授)
- 委員 村上 隆 (独立行政法人奈良文化財研究所上席研究員)
- 委員 小林 准士 (鳥根大学教授)
- 委員 佐伯 裕治 (DOWAホールディングス株式会社取締役)
- 委員 竹腰 創一 (鳥根県大田市長)
- 委員 勝部 昭 (元鳥根県教育委員会教育次長)

○歴史文献調査関係 (石見銀山歴史文献調査団)

- 団長 田中 圭一 (元筑波大学教授)
- 副団長 小林 准士 (鳥根大学教授)
- 事務局 岩屋さおり (城西国際大学非常勤講師)

(鳥根県内・日本国内調査)

- 原田洋一郎 (東京都立産業技術高等専門学校助教授)
- 小林 准士 (鳥根大学教授)
- 船杉 力修 (鳥根大学教授)
- 仲野 義文 (石見銀山資料館学芸員)
- 山崎 美和 (石見銀山資料館職員)
- 中木紗友美 (県文化財課世界遺産登録推進室嘱託)
- 和田 美幸 (元県文化財課世界遺産登録推進室嘱託)
- 藤原 雄高 (出雲市文化財課嘱託)

(海外関係者)

- ヨリッセン・エンゲルベルト (京都大学大学院助教授)
- 林田 雅至 (大阪外国語大学助教授)
- 龐 新平 (神戸大学非常勤講師)
- 大西 信行 (中央大学杉並高等学校教諭)
- 藤田加代子 (日本学術振興会特別研究員)
- 岡 美穂子 (東京大学史料編纂所助手)
- 岩屋さおり (城西国際大学非常勤講師)

○発掘調査関係

田中 義昭 (元鳥根大学教授総括)
大國 晴雄 (大田市総合政策部石見銀山課長) 遠藤 浩巳 (同遺跡整備係長)
長嶺 康典 (同遺跡調査係長) 中田 健一 (同主任技師)
尾村 勝 (発掘調査事務所調査補助員) 松尾 賢二 (同)
足立 克己 (鳥根県教育庁文化財課世界遺産登録推進室主幹)
西尾 克己 (同課文化財G企画幹) 広江耕史 (埋蔵文化財調査センター総務G主幹)

○科学調査関係

村上 隆 (奈良文化財研究所上席研究員総括) 高田 潤 (岡山大学工学部教授)
横山 精士 (独立行政法人文化財研究所客員研究員)
大國 晴雄 (大田市総合政策部石見銀山課長) 長嶺 康典 (同遺跡調査係長)
遠藤 浩巳 (同遺跡整備係長) 中田 健一 (同主任技師)
尾村 勝 (発掘調査事務所調査補助員) 松尾 賢二 (同)
足立 克己 (鳥根県教育庁文化財課世界遺産登録推進室主幹)
広江 耕史 (埋蔵文化財調査センター総務G主幹)
沢田 正明 柴崎晶子

○石造物調査関係

田中義昭 (総括) 池上 悟 (立正大学教授) 宮本徳昭 (鳥根県文化財保護指導委員)
湯川 登 (調査補助員) 長嶺康典 (大田市総合政策部石見銀山課遺跡調査係長)
遠藤浩巳 (同遺跡整備係長) 中田健一 (同主任技師) 尾村 勝 (発掘調査事務所調査補助員) 松尾賢二 (同) 足立克己 (鳥根県教育庁文化財課世界遺産登録推進室主幹)
鳥谷芳雄 (同古代文化センター調査研究スタッフ)

○石見銀山遺跡関係次長会議 (事務局 県世界遺産登録推進室)

今井康雄 (政策企画局統括政策企画監)
武永 淳 (地域振興部次長) 三代広昭 (環境生活部次長)
長谷川眞二 (農林水産部次長) 仲田盛義 (商工労働部次長)
高橋 研 (土木部次長) 福田 敏 (教育庁次長) 野村純一 (教育庁参事)

○石見銀山遺跡整備検討委員会 (事務局 大田市石見銀山課)

田中 哲雄 (東北芸術工科大学芸術学部教授)
村上 隆 (独立行政法人奈良文化財研究所上席研究員)
村田 信夫 (元滋賀県教育委員会文化財保護課技師)
横田修一郎 (鳥根大学総合理工学部教授)
大橋 泰夫 (鳥根大学法文学部教授)
小林 准士 (鳥根大学法文学部助教授)

山下 幸弘（石見銀山ガイドの会、大森町銀山自治会長）
田中 裕子（オフィス田中代表）
中村 仁美（石見銀山協働会議プランナー、中村ブレイス株式会社）
太田 洋子（重要文化財熊谷家住宅勤務）

○重要文化財熊谷家住宅運営委員会（事務局 大田市石見銀山課）

委員長 小泉 和子（京都女子大学教授、昭和のくらし博物館長）
委員 西本 俊司（石見銀山ガイドの会会長）
委員 吉岡 寛（大森町文化財保存会会長）
委員 和上 豊子（大田市教育委員）
委員 小川 和邦（大田市教育長）

○大田市伝統的建造物群保存地区保存審議会（事務局 大田市石見銀山課）

吉岡 寛（大森町文化財保存会会長） 河村政経（大森町観光開発協会会長）
斎藤英俊（筑波大学大学院教授） 小泉和子（京都女子大学教授）
山根正巳（島根県教育庁文化財課長） 村田信夫（元滋賀県教育委員会文化財保護課技師）
平本映子（元県立博物館副館長） 多田房明（江津市立跡市小学校教頭）
河原秀之（温泉津公民館長） 山崎光造（地元代表者）

島根県教育委員会

野村純一（参事） 山根正巳（文化財課長）
和田謙一（同世界遺産登録推進室長） 林原幹治（同企画幹）
足立克己（同主幹） 大矢根久和（同主幹）
佐々木慎二（同主幹） 引野佳幸（同企画員）
和田守弘（同主任） 目次謙一（同文化財保護主任）
太田俊介（同主任） 田原淳史（同文化財保護主任）
中木紗友美（同嘱託） 黒崎寿政（同課GL）
西尾克己（同課文化財G企画幹） 宮本正保（同文化財保護主任）
松本佳子（同主任） 卜部吉博（埋蔵文化財調査センター所長）
広江耕史（同総務G主幹）

島根県文化財課（世界遺産登録推進室）併任者（5部16課14名）

妹尾圭人（地域振興部地域政策課主幹） 長井達弥（同部市町村課主任）
若槻真治（環境生活部文化国際課GL） 井上幹雄（同部自然環境課GL）
山崎隆男（農林水産部農地整備課主幹） 井上純弘（同部森林整備課主幹）
田中浩史（商工労働部観光振興課主幹） 安井敏之（同部しまねブランド推進課主幹）
月森 衛（同部産業振興課GL） 野坂啓二（土木部道路維持課主幹）
星野充孝（同部道路建設課主幹） 坂本浩二（同部砂防課主幹）

高木 清（同部都市生活課主幹）

糸賀輝穂（同部下水道推進課GL）

大田市役所総合政策部・大田市教育委員会

大國晴雄（総合政策部石見銀山課長） 田中純一（同課長補佐） 竹下 健（同主任主事）

西村崇司（同世界遺産推進係長） 林 泰州（同町並み保存係長） 三谷岳史（同副主任主事）

遠藤浩巳（同遺跡整備係長） 中田健一（同主任技師） 長嶺康典（同遺跡調査係長）

大門克典（同副主任主事） 今田善寿（同主任主事） 松浦 満（同主事）

井野裕子（同臨時職員）

青木 悟（島根県地域振興部地域政策課主任・大田市駐在）

小川和邦（大田市教育長）

新川 隆（発掘調査事務所調査補助員） 尾村 勝（同） 松尾賢二（同）

関係機関連絡先

島根県教育庁文化財課世界遺産登録推進室（〒690-8502 松江市殿町1番地）

TEL. 0852-22-5642 FAX. 0852-22-5794

<http://www2.pref.shimane.jp/ginzan/> E-mail: bunkazai@pref.shimane.lg.jp

大田市総合政策部石見銀山課（〒694-0064 大田市大田町大田口1111）

TEL. 0854-82-1600（内線338） FAX. 0854-84-9156

<http://ohda.iwamigin.or.jp/> E-mail: ohda@iwami.or.jp

石見銀山遺跡発掘調査事務所（〒694-0305 大田市大森町イ826）

TEL. 0854-89-0899 FAX. 0854-89-0902

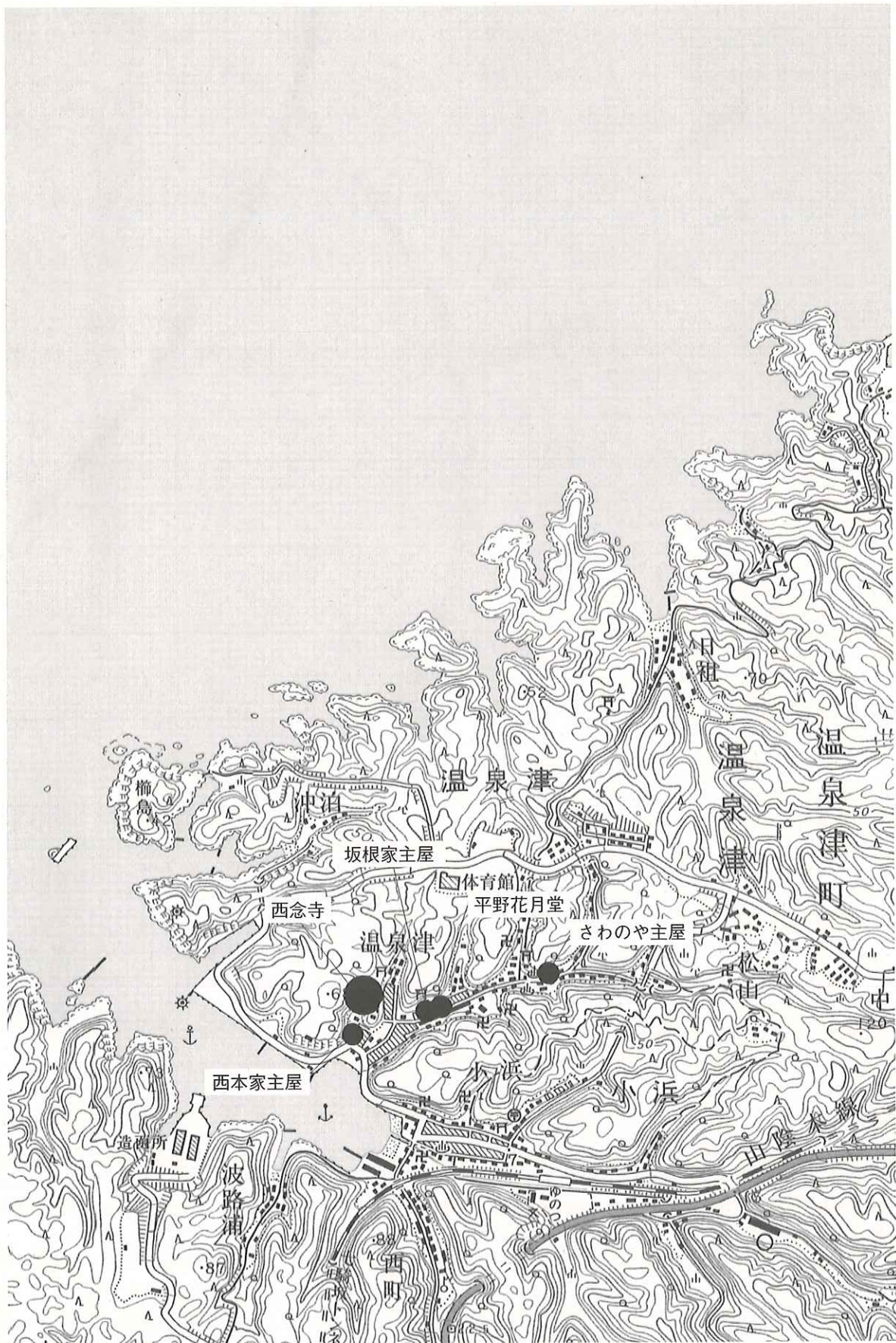
石見銀山資料館（〒694-0305 大田市大森町ハ51-1）

TEL. 0854-89-0846 FAX. 0854-89-0159

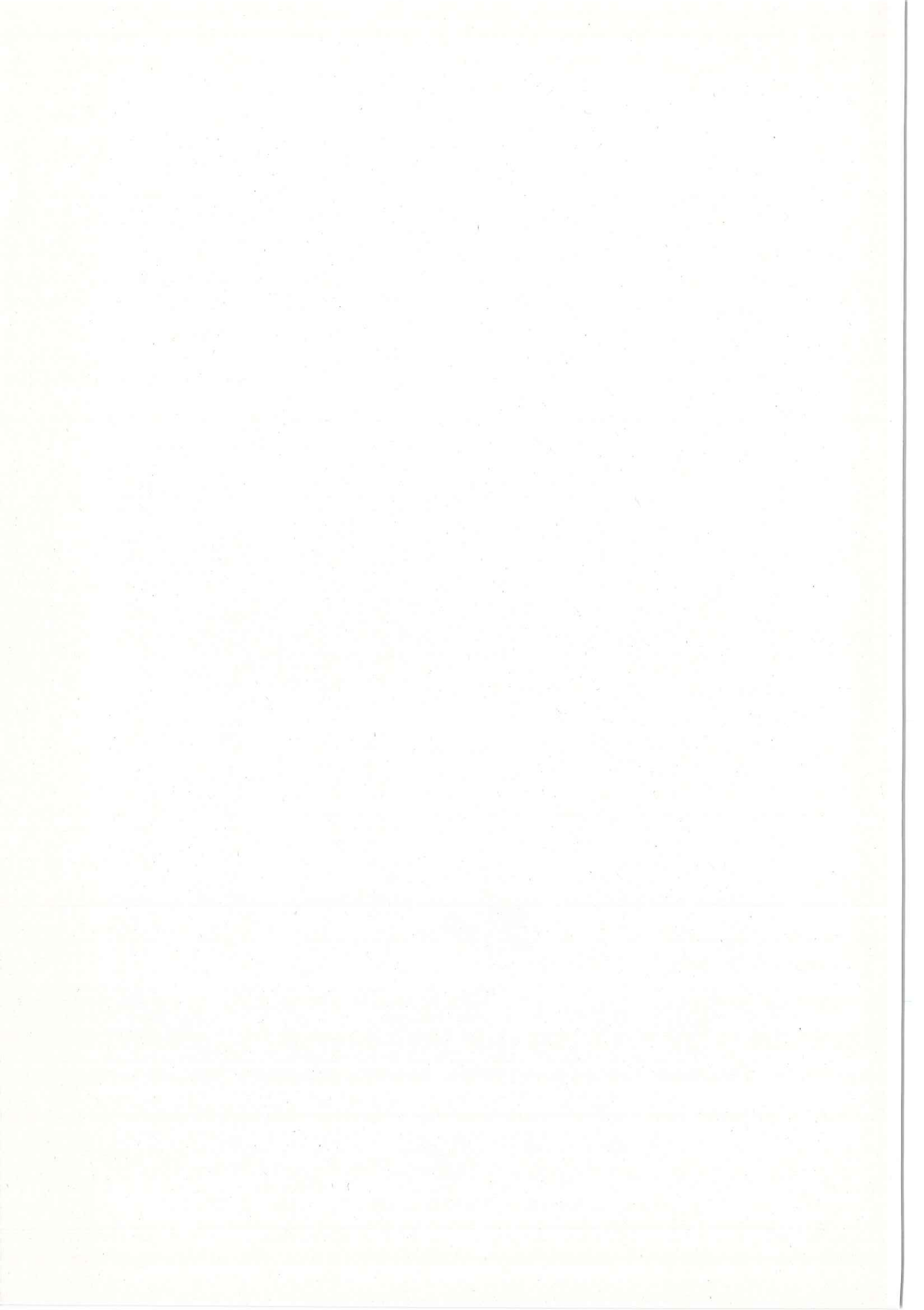
<http://www.joho-shimane.or.jp/cc/silver/> E-mail: silver@joho-shimane.or.jp

大田市町並み交流センター（〒694-0305 大田市大森町イ490）

TEL. 0854-89-0330 FAX. 0854-89-0164



平成18年度 石見銀山遺跡 事業実施箇所位置図 (2) (S=1/25000)



平成19年（2007）3月発行

石見銀山遺跡調査ノート 6

Iwami-Ginzan Silver Mine Site Reserch Note Mar. 2007 No.6

発行 島根県教育委員会
大田市教育委員会

印刷 東京印刷株式会社 松江支社
〒690-0859 島根県松江市国屋町452-2
phone 0852-26-1711(代)



